〈第2回〉

佛教図書館協会研修会

講演・講義録

平成9年10月30日㈭～31日㈮

高野山大学

1997

目 次

高野山の歴史 …… 160

高野山の文化財と奉納品 …… 168

（配付資料）「高野山の歴史と文化財」…… 191

第2回　佛教図書館協会研修会　講演・講義録

平成10年3月31日　発行

当 番 校　龍谷大学大宮図書館　〒603-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1
TEL 075(343)8123　FAX 075(411)8123

会 場 校　高野山大学図書館　〒648-0280 和歌山県伊都郡高野町高野山385
TEL 0736(56)3835　FAX 0736(56)5590

第２回　仏教図書館協会研修会　〈講演〉

高野山の歴史

高野山大学長　和多　秀乗　教授

高野山へようこそお越しいただきました。平素は、仏教・哲学系大学会議、仏教図書館協会で、いろいろご指導・ご支援賜っておりますことを厚く御礼申し上げます。せっかく高野山へお越しいただいても、不行き届きな点が多々あるかと思いますが、どうか２日間、高野山の秋を満喫していただきたいと思います。

今、越智館長のほうから話がありましたように、高野山大学の電算化というのがなかなか進みませんで、やっと数日前にゴーサインが出たところです。皆さんの大学はおそらくかなり進んでいると思いますけれども、私のところは遅れて、今から出発ということになりました。

＊　＊　＊

きょうは、高野山の歴史について話をしろということですが、高野山の歴史をまんべんなく述べましてもおもしろくありませんので、１、２点かいつまんで申し上げたいと思います。高野山の歴史を調べるときに、私どもでは常識ですけれども、ときどき間違いを起こされる方があります。

一つは、弘法大師が大師号をちょうだいしたというのは延喜21年(921)です。もしも、それ以前の文書や資料で「弘法大師」と出ておりましたら、これはまゆつば物ということになるわけです。あとの時代にできましても、前に遡って書かれた文書・資料には「弘法大師」というのは出てきますけれども、それは、その成立の条件ということをみましたら、すぐわかることであります。ところが、古文書という形式をとりまして、偽物がよく出回ります。そのときに、ついうっかり、これは非常にいい文書だと言って利用されまして、学会の中で発表されて、一つの地位を確保された。ところが、私どもが見ますと、「これ、ちょっとおかしいんじゃないですか」ということになります。

かつて、赤松俊秀という京都大学の先生がおられまして、私も少し教えてもらったこともありますし、いろいろ高野山でお付き合いをさせてもらいました。そして、話のついでに、ある人の学位論文になりました論文の資料が、どうも弘法大師が入定されまして10年ほどたった、承和12年(845)にできました文書で、東寺関係の文書で、伊勢国の大国・川合荘という大きな荘園に関する文書があります。それに「弘法大師」うんぬんという形で出てくるわけです。そう言う時、私どもは絶対これは偽物という烙印を押すわけですが、それをご存じない方が、その偽文書をお使いになりまして論文をお書きになる、本にお出しになる、ということがあります。

そこで、あるとき、私どもの勉強会、弘法大師の研究会というのを作りまして、赤松先生にも入っていただいて、その研究成果は、後に『弘法大師研究』になって出たのですが、そのときの話し合いで、「先生、あれはちょっと間違いですよ」と言ったら、「なぜ」と、こういうことになりまして、話をしましたら、「しまった」ということで先生は非常にびっくりされまして、「高野山へ来れば常識なんですねぇ。つい私は気がつきませんでした」と言って、良心の呵責を感じられたようでした。そういうことがありました。

これは、私どもとしましてはなんでもないことなのですが、やはり、よその方からみましたら、そういうことはちょっとおかしい、という判断がなかなかしがたいというところで、ヨーロッパでも偽文書、即イシドール文書という定評のある文書がありますけれども、真言宗関係でも、又一般に宗教文書というのは偽文書が多く、高野山文書にもそういうのがあります。

＊　＊　＊

もう一つは、今からお話しようと思っております平清盛の文書であります。ちょっと話が長くなりますが、こういう話をいたしますのは、ちょうど霊宝館で後白河法皇の院宣が出ているという話を、きのう、霊宝館の方から聞きまし

て、私も、実はそれは見たい文書なのですが、その文書の後ろに署名人がずうっと名前を書き連ね、花押を書いているのです。その中に平清盛の花押があるのです。これは本物でして、「太宰大弐平朝臣」と出まして、清盛の書判が出てくるのです。これが天下に有名な平清盛の書判ということで、私は若い時分からそれを見てきたわけです。ところが、まったく違う書判が高野山に一つ残っているのです。あとで写真をお見せいたします。それも、実は高野山では「平清盛」と付箋が付いているのです。

ところが、後白河法皇の院宣に出ております平清盛の書判と、高野山に残っております、少し時代は下りますけれども清盛の文書の書判と、まったく違うものですから、それが日本で一つしかないということになりましたら、たいていの人は、これは偽物だという判定を下すのは当然であります。

そういうことで、平清盛に興味をもちまして、調べたことがあるのですが、その文書につきましては、まだ解答を自分で見つけだしておりません。今から、そういうことで、清盛と高野山に関する話をさせていただきたいと思います。

＊　＊　＊

高野山は、ご承知のごとく山の上にありますのと、それから、夏になりましたら雷様がよく暴れます。一番最初、正暦５年(994)という年に伽藍が落雷のために炎上し、次に、久安５年(1149)にもまた落雷のために火災があり、そのあと、４回ほど火災があるのですが、昭和元年12月26日に起きました火災は、おそらくロウソクか灯明の不始末で燃えてしまいまして、弘法大師以来ずうっと続いて守ってきておりました仏像、そういうものが全部、大正から昭和への変わり目に全焼いたしまして、せっかく千年守り伝えてきました重要な本尊さまがそこでなくなるという、そういう悲劇がありました。

これは人災でして、そのときの写真を手に入れましたが、その写真だけは、どこにも飾っておくわけにいきませんで、奥深くしまっております。例えば天保14年(1843)の大火のときには、木版刷りの伽藍炎上の絵が出ました。これは号外で出たのか、あるいは、そのほかの情報的なものとして出たのかわかりませんけれども、ちょうどＢ４紙１枚ぐらいの大きさに、燃えている大塔だけがかいてありまして、火炎だけがスッと朱の筆で２本ほどなすってあるのです。それを「高野山大火の図」と称しまして、ときどき骨董屋で売っているのです。それを手に入れまして、大事に置いておりますが、火事の絵図というのはあまり縁起がよくありませんので、しまい込んでしまっております。それを飾るわけにいきませんので。

そういうように、高野山は大火に見舞われるということが非常に多い。しかも、その原因の大部分が落雷であります。２回目の久安５年というのは５月であります。高野山の火事というのは、だいたい５月というふうに出てくるものですので、今も学生諸君とそういう話をしておりましたら、「先生、５月にはそんなに落雷はないですよ」と。「それは旧暦で、新暦に直したら７月になる。梅雨明けの雷さんだ」と説明するわけですが、久安５年の５月に２度目の落雷による火災が起きました。

このときは、幸いにも、仁和寺の高野御室覚法法親王という人が高野山におりました。覚法法親王は、しょっちゅう高野山で修行をしておりましたので、高野御室という名前で呼ばれております。白河上皇の皇子でして、この人が、「火事だ」という声で気がついて外へ出たら、伽藍のほうから火が出て、煙が出ている。そこで、輿に乗って見に行ったというのですから、やはり天皇の息子というのは贅沢なものだなと思いました。高野山へ行って出家していても歩かないのかなと思いました。それで、伽藍の南側へ来て、ちょうど通りになりますが、そこで見ていたら、「もし火の勢いがすごくなったら帰る所はないですよ」と言われて、慌てて東のほうへ行って見物したと。

普通は、大塔に落雷します。そのときも、大塔が焼け、金堂が燃えて、それから灌頂堂とか、そういった所が全焼するのですが、御影堂は残ります。御影堂は正暦５年の大火にも残るのですが、たいてい御影堂は残るのです。その間は、

だいたい２丈ばかりという、そういう近い所でも類焼を免れたという、そういう見物の記録をちゃんと残してくれているのが非常にありがたいのです。高野山の大火の記録というのは、そのときと永正18年(1521)の大火の２回限りであります。

＊　＊　＊

ところが、その覚法さんという人がいたおかげで、高野山の復興が非常に速くなります。覚法さんは、宗教界でやはり大きな力をもっておりますのと、政治の世界でかなり発言力があったようです。このときに、清盛の父親の平忠盛が播磨守をしておりましたが、忠盛が復旧工事を請け負った。これは、大工事を完成したら、そのあと、ちゃんとした要求を実現するわけです。播磨というのは大国ですので、播磨の国司の収入というのは莫大なものがあります。おそらく、もう一度播磨守に任じてくれというふうな交換条件で、これを、成功の重任と言いますが、忠盛は引き受けたのだろうと思います。

忠盛は金堂を１年で完成させました。昔の金堂というのは、２層の屋根でありまして、この金堂を完成するというのは、私も今、ちょっとお寺を細工をしているのですが、その準備から、上棟式から、竣工というふうな、そういう経過の時間を考えてみましたら、１年というのは非常に速いスピードだと思います。それは、覚法・鳥羽上皇といった人々の力というものが、また忠盛という、その当時、平家は新興勢力としてちょうど台頭期で、しかも、播磨守という、大変実入りのよい国の国司であったというようなことで、そういう力が寄り集まりまして、高野山の復興が速かったのだろうと思います。

ところが、その途中で忠盛が死んでしまう。死んでしまうとすぐ、清盛がそのあとを引き受ける。これは、おそらく清盛も魂胆があって引き受けたということになります。もちろん清盛も、『平家物語』を見ますと、かなり悪者に書かれておりますけれども、例えば藤原道長にしろ、清盛にしろ、強力な政治家というものも、一面から見ますと非常に信仰が深い。これは今の政治家どころではない、もっともっと信仰が深いという、人間としてはかなり優れた人物だろうというふうに思うのですが、そういう清盛が、今度、親の代わりに、高野山の伽藍の建築を請け負うということになります。

＊　＊　＊

その間、いろいろありますけれども、大塔が完成をいたしましたときに、大塔の曼荼羅の八葉の中尊を、自分の頭の血を出して、そして、それを絵の具に加えて塗ったという伝承があるのです。それは、美術史家が高野山へ来るたびに私はその話を出しまして、「本当かどうか」と問いましたら、「あれはひょっとしたら血かもわからないな」というふうな答えが返ってきます。今、ちょっと化学的に検査をしたらすぐわかるのですが、私はしないほうがいいと思います。やはりこれは宗教的な唱導の問題として伝承だけでおいておくほうがいいのではないかと思います。あるいは、ひょっとしたら本当かもわかりませんが。

清盛の製作した両界曼荼羅は、常明という絵師が描くのですが、その両界曼荼羅というのは、一つの重さがだいたい16貫もする大きなものでありまして、そういう清盛の所謂、血曼荼羅と称するものは、清盛が、やはりかなりの人物だったというしるしだろうと思います。そうして大塔が完成をいたしまして、高野山にそのままそっくり寄進される。

ところが、そのとき、大塔には、まだ大きな荘園が付いておりませんでした。そこで、その当時、高野山におりました法華房鑁阿という、これもまた得体の知れない怪僧がいまして、出身が全然わからない。いつごろ高野山に入ってきて、どういうことをして、どういう功績があって頭角を現したのか、ということはまったくわからないのですが、おそらく私は途中の出家者だろうと思います。それまで、どこかで大きな働きをしていた武士か、あるいは下流の貴族であるか、そういった人物だろうと思うのですが、法華房鑁阿という人が、あるとき、平清盛が亡くなった直後、平氏ゆかりの大塔において、平氏の怨霊を追悼するために、後白河法皇にお願いをいたしまして、法要をするために荘園を

くれと。荘園とともに、今、京都の高雄の神護寺にあります弘法大師ゆかりの高雄曼荼羅と称するものがあります。非常にすばらしいもので、その曼荼羅が京都の蓮華王院、後白河さんの一種の宝物庫、そういう所に置いてある。それもついでにください、それは平家の怨霊をなだめるためだ、ということで、後白河さんからまんまと高雄曼荼羅と、それから、ついでに播磨国の福井荘という荘園をもらってくるのです。

実は、その播磨国の福井荘というのも、もともとこれは高雄山神護寺の荘園であったわけです。ちょうど神護寺の文覚は、後白河法皇に直訴いたしまして、無礼を働いたというかどで伊豆に流されているわけです。文覚の失意のときに、ちょうどうまく法華房鑁阿という人は、本来、高雄山にあるべき高雄曼荼羅、これは後白河さんが持っていたわけですが、それと福井荘の荘園を２つともらってきた。

それで、それを根本大塔領に付けまして、平家の追悼の法要をするとともに、多くの社会事業を始める。社会事業というのはどういうことかといいますと、たくさんの戦乱の被害者が高野山へ登ってきます。そういう人々を受け入れて、最期まで看取るような施設をこしらえる。この施設を高野山だけではなしに、伊勢国、あるいは岩清水八幡宮、あるいは河内の弘川寺とか、そういった各地にこしらえるのです。後に西行が出回った所をちょっと思い浮かべていただきましたら、ほとんどその中へ入っているわけです。

＊　＊　＊

社会事業とともに、平家の怨霊を追悼するためだ、ということで後白河さんからもらってくるのですが、ちょうどそのころ、文覚が帰ってくるわけです。ちょうどもらってきたとき、文覚は都に帰っていたのですが、まだちょっと謹慎の身で、精神的に弱みがあったのか知りませんが、黙っているのです。そのあとしばらくして、後白河法皇と文覚がすれ違うときに、文覚が後白河法皇と目礼を交わすところが出てくるのです。それ以後、文覚は再び後白河さんに近づきまして、「実は、高野山にやった高雄曼荼羅と福井荘、これはもともと神護寺のものではないですか。私は今から神護寺を復興するので、ぜひ返していただきたい」と、またこれは文覚一流の脅しで後白河さんが脅されて、そのまま高野山に断りなく、根本大塔領となりました福井荘、それから両界曼荼羅というものを高雄の文覚にやってしまうわけです。高野山までそれを取り戻しにくるときには、ちゃんと平氏の軍兵が来まして、ものものしい警護のもとに没収して帰るわけです。

＊　＊　＊

それを今度、高野山の法華房鑁阿が、綸言汗の如し、天皇がいっぺんそういうことを言って約束をまた途中で破棄するとは何事か、それなら交換条件ということで、これもまた脅しに行ったのだろうと思うのですが、後白河法皇の所へ行って新しい荘園をくれと直談判をいたしました。どこの荘園かというと、これは備後国の太田荘。太田荘を福井荘の代わりにくださいということで、後白河さんを困らせる。後白河さんも、太田荘という荘園の事情を考えましたら、これはもうやらなければしょうがないと思われたのだろうと思います。

備後国の太田荘というのは、最初は、平重衡が持っていた大荘園であります。東大寺を焼き討ちしました平重衡です。重衡は、太田荘を手に入れますと同時に、後白河さんを荘園の名目上の領主、本所という職を後白河さんに進呈をいたしまして、自分は、その土地の実際上の支配をする。ところが、平重衡が捕まえられて首を切られるわけですが、その重衡を捕まえたのが土肥実平。この土肥実平が太田荘を管理するわけです。土肥実平という人物は源氏の重臣なので、重衡の荘園である太田荘をそっくりもらってしまうわけです。それに目をつけた高野山の法華房鑁阿は、「あの土地をください」ということを後白河さんにお願いする。名目上の荘園領主は後白河さん。これは平重衡のときと同じでありました。そこで、後白河さんのもとへ行って、「平家の怨霊に悩んでいるあなたも、もともと平家ゆかりの荘園である太田荘を、忠盛と清盛の父子２代にわたって完成した平家ゆ

かりの高野山根本大塔領として寄進するのが、平家怨霊を追善するのに一番よろしい」という理屈で、高野山へもらって帰ってくる。これは非常におもしろい駆け引きがあったのだろうと思いますけれども、後白河さんをゆするとまでは言いませんけれども、そこまで後白河さんを動かして持って帰ってくるというのは、やはり着眼点が非常によかったと思います。そうして、文治２年(1186)という年に、備後国の太田荘は高野山の荘園になるわけです。

そういういきさつがありまして、今日の大塔というのは平氏と非常に関係が深い。だから、明日、霊宝館へ行かれましたら、後白河さんの院宣のあとのほうに、清盛の薄い花押がありますので、よくご覧になっていただけたら結構かと思います。そのように、高野山は平氏と密接な関係がある。その後、源氏との関係が出てくるわけです。その太田荘の後継者が土肥実平である。土肥実平を説得するには、まず、源頼朝を説得しなければいけない。そこで、鑁阿は源頼朝にも働きかけた。頼朝は、土肥実平に因果を含めて、「高野山へ寄付しろ」ということを言い渡すわけです。一方では、後白河さんも土肥実平に「おまえ、もうここまで来たら、太田荘を高野山に寄付しろ。もともと平氏にかかわりのある荘園だから」と、そういうこともあったのだろうと思います。

＊　＊　＊

この後、鎌倉幕府と高野山の関係は非常に密接になるわけでして、特に鎌倉幕府は金剛三昧院というお寺を造りました。明日行かれるそうですけれども、多宝塔、これも、石山寺の多宝塔に次ぎまして、日本で第２番目に古い非常に落ち着いた多宝塔。天気がよければ、その中を開けてもらいましたら、中の仏さまはおそらく、きのうおとといぐらいに作ったような見事な仏さまが眼前に現れますので、びっくりするようなお堂です。これは貞応２年(1223)ごろに作られました多宝塔です。金剛三昧院は、源頼朝をはじめ源家３代の供養の場所になっております。それから、その当時、秋田城介の役職にあった幕府の重臣の安達氏が親子３代にわたりまして住職ではありませんが、金剛三昧院に入りまして、高野山の僧侶の学問の奨励と、監視という、両面の任務で高野山にいたのです。霊宝館へ行かれましたら、高野版というのが出ております。高野山の出版物です。版木は今でも残っておりますが、それも安達氏が大きな功績の一つです。

あるいは、九度山の慈尊院から高野山へ登ってきます参詣道は、180町、５里ありますが、その180町の町石も、この安達氏が中心になりまして、勧誘をしまして完成したものであります。180町180本と、それから、１里、２里、３里、４里、５里という里石と、それから山上の36町でありますけれども、37本の町石が立っております。こういう道標というもの、これは文永・弘安のころにできたものでありますので、非常に重要なもので史跡となっていますが、これは、九度山の慈尊院の横に180町石というのがあります。下から順番に登ってくるたびに、町数が減ってくるわけです。増えたらかえって疲れると思うのですが、減ってくるからまだいい。引き算で登ってくるほうが山は登りやすい。

昔の人は、あまり山を登るのを苦にしておりませんで、例えば、北条政子が２度高野山へ登っております。登ってきますのは、源頼朝の庶子、貞暁が高野山におりまして、この人は、お母さんのおなかに宿った時分から北条政子に追いかけられまして、頼朝は自分の子供を腹心の部下に頼みまして、あちこち逃げ回るのですが、いよいよ危ないということで、京都の仁和寺へ入れるのです。仁和寺にも外護者がいるのですが、それも亡くなってくる。そこで、最後に高野山へ逃げてくるのです。高野山には行勝という、これまた怪物がおりまして、この行勝という人を慕って入ってくる。

ところが、高野山へ入ってきますと、北条政子はすぐにあとを追いかけてきまして、山麓の天野という所へ来まして、「出会いたい」と、こういうことになります。そこで、貞暁は、行勝と一緒に北条政子に会いに行くわけです。そうすると、北条政子は、「おまえは武将にならないか。還俗して源氏の跡を継がないか」と、

こういうことを言ったわけです。

ところが、貞暁という人はやはり肝っ玉がすわっておったのか、本当は一番将に将たる器であったのか、やにわに短刀を抜きまして、左目をえぐり取った。そして、自分は武士の世界に帰る意思はないということを政子に見せたというのです。そこで政子はびっくりしまして、びっくりしたというよりも安心をいたしまして、それ以後、高野山に対して非常に力を尽くす。哀れみをもったのでしょうが、それで、金剛三昧院の多宝塔建立とか、源氏３代の頼朝・頼家・実朝の納骨をしまして、供養の法要をする。

その上、荘園を非常にたくさん付けました。そこでも重要なことは、その荘園の収入をもって、いろいろな福祉の施設をこしらえた。山麓の天野という所に無縁の尼の生活費をみるだけの荘園を与え、建物を建て、定員60人で、その施設を経営した。そのほか、諸国でたくさんの恵まれない人を助けたというような記録があります。これは、先ほど言いました法華房鑁阿が、太田荘あるいはそのほかの荘園、その前は福井荘ですが、荘園の収入でもって、たくさんの恵まれない人の施設をこしらえた。というのと同じことをしたわけです。

これはやはり、この当時、宗教家というものは、僧侶あるいは寺院というものは、福祉活動をするのが当然でありました。幕府も同じことをします。朝廷も同じことをします。政府というものにとって、治山治水事業あるいは福祉事業は、やらなければいけない責務なのです。律令政府もそうですし、律令以前におきましても、例えば『日本書紀』などを見ますと、天皇というのは、しょっちゅうそういう福祉の政策を打ち出しております。これは当然のことです。

＊　＊　＊

だけど、僧侶はなぜそういう福祉事業をするのか、という問題があります。これはやはり自分の修行のためである。それはもう戒律である。戒律というと、普通、何々してはいけない、不殺生・不偸盗・不邪婬と。不殺生というのは、殺してはいけないけれども、殺すなという反対に、生かせということが入っているわけです。だから、戒律というものは、何々してはいけない、というように、十善戒とか、五戒とか、いろいろな種類の戒がありますけれども、皆、してはいけないということですが、戒も律も、やはり善いことをしろという面が、むしろそのほうが本質であるわけです。

例えば、皆さんも仏教系の図書館関係者ですので、ご存じのはずですが、七仏通誡偈というのがあります。これは、諸悪莫作(諸々の悪をなすなかれ)、衆善奉行(多くの善を奉行せよ)、自浄其意(みずからそのこころを清めよ)、是諸仏教(これ諸仏の教えなり)という衆善奉行なのです。悪いことをしてはいけないという次に、やはり善いことをしろと、これが本当のお釈迦さんの教えであります。悪いことをするな、だけではいけません。善いことをしなければ人間社会は成り立たないわけです。

律を見ましても、福田思想とか、看病とか、そういうことは律の一番重要なことになっております。今は、だんだん、そういう福祉事業というのは行政のほうに取られまして、お寺とか坊主はちょっと困る状態になっておりますが、本来は自分たちでやらなければいけない。

そういう基本精神を忘れているから、こういう羽目になるわけでありますが、鎌倉時代におきましても、やはりそういう仏教の根本精神、衆善奉行ということは忘れられていなかった。しかも、それが宗団とか、高野山のような大きな教団の根本の政策になっていたということが、金剛三昧院とか、あるいは法華房鑁阿という人の例からみましたら、よくわかるわけですが、これが中世末期までずうっと高野山の場合は続き、中世の末期でそういうことがなくなります。そういう事情があります。

＊　＊　＊

ところで、清盛ですけれども、実は、高野山にこういう文書があるわけです。これは活字になっているのですが、だけど、これはあまり信用されないのです。これは文書の小さい写真ですが、とても平安時代の字とは思われません。中世の終わりごろの字であります。そこに書判があるのです。これです。ちょっと伸ばしまし

たが。これを高野山では平清盛の文書といっております。どういうことが書いてあるかといいますと、「この度、大塔造立二世の大願成就せしめおわんぬ」。大塔を建立して、「二世の大願」。父、忠盛と自分との２代にわたる願いごとが成就した。「香花料のために」、お香や花を供える財源として、「安芸国の高田荘を寄進せしむるところなり。永代知行すべし。よって状すること件の如し」。文書の後半は、平安時代の言葉とは思えない。だけど、安芸国(広島県)の高田荘を寄付するという、そういうことです。

これは、平清盛の書判です。「太宰大弐平朝臣」と書いてあります。薄い薄い書判です。これは霊宝館に出ているそうですので、ゆっくりご覧になっていただきたいと思います。次に、この書判というのはまったく別なのです。従来は、これはまったくバカにされておりまして、高野山の偽文書ということで、問題にされておりませんでした。

ところが、実は『花押かがみ』というのを作りました皆川完一さんといいまして、東京大学の史料編纂所におられました方から山梨県の大善寺というお寺に高野山の偽文書と同じ書判の文書があるということを教えられました。その大善寺の文書は平安の終わりの文書に間違いなく、花押の横に、「平清盛」と、こう書いてあるのです。これはあとの人が書いたわけですけれども、平清盛の書判。清盛の文書だということです。その文書の内容というのは『平安遺文』に入っているのですが、あるお寺の僧侶が全部どこかへ出てしまった。それで、元へ返れというような命令であります。山梨県にこういうものがありまして、これは平清盛であるかどうかということの証明はまだできていません。それなら、中世の末期に高野山でこういう新しい文書ができたけれども、なぜ、高野山の人がこの書判を知っていたのか。現在、高野山と、山梨県の大善寺と、日本に２つしかないのです。

このことは実は、ずうっと昔から問題にしておりました。大善寺に近いうちに暇になったらいっぺんお伺いしまして、この文書をゆっくり見せていただいて、そして、それがなぜ平清盛であるというような説明がついているのか、そういうことから調べまして、そうして、事の次第をはっきりしたいと思っております。

＊　＊　＊

また、高田荘というのが高野山に入ったかどうか、ということも実ははっきりしないのです。いろいろな資料を見ましても、それはわからない。だけど、この文書は偽物であるとしても、高田荘が入ったとしても、これは決して不思議ではない。そこらへんまでははっきりするのですが、それ以上のことにつきましては、あまり強く言うことができない。だから、いまだにこういう宙ぶらりんの話をするわけですが、これは、やはり一つの偽文書か、あるいは模倣した文書のもつ意味というものの強みだろうと思うのです。もしこれが偽文書であったとしても、なぜこれが偽物であるか、なぜ偽物を作ったか、そういう意味が大切になってくるわけであります。

例えば、最初に言いました承和12年(845)の太政官布にあります伊勢国大国・川合荘を東寺に施入したという文書ですが、そこで「弘法大師」ということばが出てくるので、これは偽文書です。けれども、なぜ偽文書を作ったか。偽文書を作るには、やはり作るだけの理由がある。その理由を調べるということが、偽文書の研究の一番おもしろいところでして、偽文書は「偽文書だからだめだ」と言って捨ててしまっては、これは本当の歴史の研究にはならない。なぜそれができたか、それが出てきた歴史的な必然性があり、更に偽文書の効用というか、後々まで大きな働きをする偽文書があります。

＊　＊　＊

最後に、久安5年(1149)の大火のあと平治元年(1159)、ちょうど大火から10年たちまして、弘法大師の「御手印縁起」と称するものが、鳥羽上皇が大事にしておられた篋の底から出てきたということで、鳥羽上皇の后でありました美福門院の好意により、東寺の長者がそれをちょうだいして、高野山へ麗々しく持ってくるわけです。弘法大師の手印があるということで、それを「御手印縁起」というのですが、それは、平治元年になぜ突如としてそういうものを麗々

しく持ってきたか。

ちょうど大火のあと、高野山は経済的な理由もあって荘園をなんとか拡張したい。そこで「御手印縁起」には何が書いてあるかといいますと、弘法大師が天野の丹生都比売命から譲られた荘園は、実は応神天皇から譲られた土地だと。最初は、南の境界は海だということ、これは太平洋になるわけです。別の文書では、阿氐川荘ということになるのです。北の境は大和川、紀ノ川であります。東はどこまで、西はどこまでというふうに、高野山の寺領の四方の境が、その「御手印縁起」に書かれている。弘法大師がそこへ手印を押されているという、そういうものが平治元年に突如として出てくるわけです。そして、それが麗々しく高野山へ奉納される。高野山は、後にその文書を証拠文書としまして、朝廷に寺領の回復運動をするわけです。そうしますと、朝廷も放っておくわけにはいきません。高野山は寺領の復旧運動という論法で寺領の拡張運動をする。その拡張運動の典拠になったのが、その「御手印縁起」というものです。

ところが、『定本弘法大師全集』が、今年になってやっと完結をいたしました。10年ほどかかりまして、ちょうど私がその「御手印縁起」を担当しまして、「御手印縁起」の原本というものを見せてもらいました。今度、こういうものは隠しておくべきものではないということで、それを図版にして『定本弘法大師全集』に収めております。その中の解説に書いておいたのですけれども、弘法大師の御手印があるといっても、それは３人か４人の御手ではないか、そういうこと自体がおかしいと。

実は、そのとき、火事のあと慌てて復興運動に必要な収入を得るために、寺領荘園を拡張する、そこによって工事を完成したい、そういうために作ったのだろうというのが、これまで戦後の学者の定説だったわけですが、それと同じ内容のものが、御遺告という名前で昔からありました。安和元年(968)という年の奥書の写真だけが残っているのです。今、原本はないのです。原本は、桂湖村さんという人がお持ちでした。

東京大学にその写真がありました。一枚だけ、奥書の部分でした。それを見せてもらって、文化庁へ行きました。美術工芸課の濱田隆さんにお願いして、冒頭の部分と末尾の部分の写真を持っておりました。それを見せていただいきました。最初の文書が粘葉装であるということがわかりました。今残っておりますものはほとんど巻物なのですが、粘葉装であったことは転写が容易であったことを物語っています。

それから、文化庁のほうで、桂湖村さんの息子さんが東京のある高等学校の先生をしているということで本人に電話で聞いてもらいましたところが、「それはもうありません」と言う。おそらく、戦後の混乱期にどこかへ売り飛ばしたのだろうと思います。日本にあれば、またお目にかかることもありますけれども。桂さんという人は、同じ安和元年という銘のあります『成唯識論』まで、それは、その当時の重要美術品というものをお持ちになっていた。だから、かなり持っておられたのだということはわかりますけれども、そういうことで、結局は行方不明の侭で終りました。

高野山の大火のために焼けた伽藍を復興する、その目的のために作ったのだという偽文書も、よく調べると、もっと昔からあった。だから、後に成立した偽文書説は通用しない。要は根本の偽文書の検討が重要課題になってくるわけです。そういう偽文書につきまして、３点ほど、お話をいたしました。

偽文書というものがあると、それにはいろいろ曰く因縁がつき回っている、それがまだまだ解決は先のことだろう、あるいは、先がどうなるか、おそらく解決のメドは立たないかもわかりませんが、そういうたくさんの問題が高野山にある。だから、高野山の歴史というものは、知られていることよりも、知られていないことのほうが多いわけであります。つまらない話をいたしましたが、何かご参考にしていただきましたらありがたいと思います。どうも失礼いたしました。(拍手)(了)

第２回　仏教図書館協会研修会　〈講義〉

高野山の文化財と奉納品

高野山霊宝館主任学芸員　井筒　信隆

はじめまして。高野山霊宝館の井筒です。きょうは、スライドを約60枚ほど用意しておりますので、高野山の文化財の主なものをスライドを用いながら説明をさせていただきたいと思います。高野山は、弘仁７年(816)に弘法大師空海が真言密教の修行の道場として開創された山ですが、長い歴史を有する密教の山でありながら、平安時代中期以降、弘法大師信仰とか、その当時盛んでありました弥勒浄土信仰、阿弥陀浄土信仰が複合いたしまして、高野山独特の高野浄土観というものが生まれました。当時の宗団の人々は、今言われるような宗団的なセクト的な感じではなしに、いろんな所へ出掛けていって、いろんな勉強をされております。高野山もそういう勉強のできる所として、いろんな人が訪ねてこられました。また、高野山でお住みになって、亡くなった人も多くおられるようです。高野山で亡くなった場合に、その持ち物であったものが残っていきます。

美術史の中でも、一つの比喩なのですけれども、平野の正倉院に対し、山の正倉院としては高野山なのだと。海の正倉院に当たるものは、瀬戸内海にあります大三島なのだということを言われる人もおられるぐらいです。ある面では、日本の文化を語っていくために欠かすことのできない重要な場所であると言われている山でもあるわけです。そういう意味で、高野山にはたくさんの文化財が伝わっております。

お配りをいたしました資料(本文33頁参照)で、「高野山の歴史と文化財」という題を一応つけさせていただいたのですけれども、その１番目に、国宝ならびに県指定文化財というものがございます。1996年の３月５日現在、国宝25件・4,695点、重要文化財177件・14,204点、それから、和歌山県の指定文化財36件・2,878点、合計いたしますと238件・21,777点という膨大な数字の国ならびに県指定の文化財が高野山に伝わっています。

国指定の文化財だけでも、全国的にみまして、約６％のものがここに集中して伝わっているわけです。質的にも日本文化を語るうえで欠かすことのできない重要なものがたくさんここに集中してあるという、ちょっとほかでは見当たらない場所です。高野山の文化財というのは、そういうような重要な意味をもっているものが多いのです。後ほどスライドで見ていただきますけれども、国宝の「仏涅槃図」という日本で一番古い「応徳涅槃図」とも言われているものとか、弘法大師の出家の宣言書と言われているような『聾瞽指帰』とか、先ほど、学長さんのほうからお話があった、大塔の太田荘を寄進されました後白河法皇の宸翰などを収めた宝簡集類があります。この宝簡集類は、日本史を語るうえで欠かすことのできない貴重な古文書類が多く、国宝になっています。

そういう意味で、高野山というのは、ある面では、仏教の中の密教の山というのではなしに、いろいろな宗教が入り込んで歴史が成り立ってきた山でもあります。だから、古い奈良仏教の関係のものとか、それから、当然、平安時代のもの、天台宗系統のものや鎌倉仏教関係のもの、それから神道関係、修験道関係、そういうものも資料としてずいぶん残ってきています。高野山というのは、ある意味では、歴史の中における日本の文化サロン的な場所であった部分が認められます。

先ほど申し上げましたような、国指定とか県指定の文化財ばかりでなしに、現在、117カ寺のお寺が高野山にあるわけですけれども、そこに伝わっております聖教古文書、それから仏画、工芸品、彫刻など、そういう諸々のものを合わせますと、その数は何十倍になるのではないかと思います。その実体的な実数というのは、いまだかつて確認をされたことはございません。

過去から、文化庁ならびにいろいろな組織が作られまして、調査はされていますが、途中でいつも頓挫しているというのが実態です。あまりにも膨大な数字になるので、途中でどうも作

業がいつも途切れてしまって終わってしまっています。聖教古文書なども、ラベルが何個もあったり、途中で放棄された目録がたくさんあったりと、そういうような状況にあるのが実態です。たぶん今世紀中にはケリがつかないと思います。21世紀にまた、いろいろな人がそういうような方面で整理をされていくのだと思いますけれども、それほど高野山というのは、文化財というのか、そういう文化遺産がたくさん伝わっているところなのだということだけ覚えて帰っていただきたいと思います。

また、霊宝館のほうに、塔頭寺院の聖教とかそういう文化遺産を納めていただくように働きかけ、様々な聖教類は集めるようにしております。そのなかで宝寿院、今は専修学院と言っているのですけれども、高野山の僧侶の養成機関になっているところですが、そこに伝わっている聖教古文書も寄託収蔵いただいています。その未指定品の聖教の整理をしている過程で、整理にあたって見逃してはいけないのではないかという点があります。

お配りをいたしました資料「一空書写聖教関係リスト」(本文36頁～37頁)を見ていただきますと、私が、普通部の３号箱にある一空さんの関係のものをちょっと拾い出して、奥書のところに一空さんが年齢をお書きになっていますので、そういうものを編年的に並べ替えてみたものです。

宝寿院の聖教古文書というのは、現在、特別部で103箱、普通部で124箱、それから番外としまして31箱、合計258箱伝わっていまして、総点数にしますと約６万点ぐらいになるものです。その中で、サンプリングをし、一空さんの書写次第等を編年史的に示してあるわけですけれども、一番最後の行のところに括弧で結んだ数字があります。その数字は、昭和４年から５年にかけて、中野達慧さんが宝寿院の聖教を整理をされたときの番号です。無作為に、箱の中のものを順番に整理番号を打たれておりますので、私が作った編年的な感じの並べ方とはずいぶん違っています。この箱の中には105件ほど聖教が入っています。その中で、一空さんの関係のものは、だいたい一箱の中に６割ぐらいあると思います。

そのほか、ここには挙げていませんけれども、一空さんがお経とか、次第とか、そういうものを写すに当たりまして基本図書になったものを、方々から集められたと思われるものも保管されております。書写した人の名前が違っておりますので、その編年資料の中には入れておりませんけれども、一空さんがどうも自分の勉強のために集めたものではないかと思うものがずいぶんその中に含まれております。ということは、すなわち、この一箱は、一空さんの一つの人生をかけた勉強のあとを物語ることができる大変貴重なものなのだということが言えるのだと思います。

そういう意味で、図書館とかそういうところでの整理の方法は、博物館とは少し様子が異なってくるのだと思いますけれども、一箱単位で寄贈を受けたり、買われたときには、そういう点も含めて考慮をされたうえで、図書館の資料として、また、閲覧に遇するための整理番号を付けていただく工夫も必要ではないかと思います。私は、現場で働いている人間として、史料の取り扱いに、そういうことも考慮する必要を常日ごろ感じております。

霊宝館でも、中野達慧さんの整理をもとに宝寿院さんから預かっておりますので、その番号を変えるわけにいきませんけれども、最終的には、そういうような一応のかたちの編年史を作りながら、一箱一箱整理していってあげたいなと、将来の研究者のために、そういうかたちのものを作ってあげたいなとは思っております。

前置きはこれぐらいにいたしまして、次に高野山の文化財として、どういうものが伝わっているか、お話をさせていただきたいと思います。配布しました資料(本文33頁以下を参照)の逐一、文化財の歴史的背景を話しているわけにもいきませんので、下のほうに、各世紀の主立った文化財を列挙しておりますので、それに基づき主なものをスライドで映させていただき、説明をさせていただきます。

スライドがあまりよくないものもあるかもわかりませんけれども、その点はご辛抱願いたいと思います。

◆

先ほど申し上げましたように、高野山というのは西暦816年の弘仁７年に開かれたわけです

けれども、最初の【スライド１】は、鎌倉時代の終わりぐらいの高野山の情景を描いたものです。高野山に昔から伝わっております絵図などをもとに、江戸時代に模写されたものを集めた国宝の「又続宝簡集」第61に収められている高野山の風景画の１画面です。高野山の中心になっております伽藍のあたりを描いている部分です。

【スライド１】国宝　又続宝簡集巻第61　金剛峯寺蔵

これが根本大塔で、この建物が金堂です。今、銅板葺きになっているのですけれども、昔は檜皮葺の建物です。こちらのほうに桜の木が描かれておりますが、この桜の木は、『平家物語』に出てくる清盛と弘法大師の対面の桜と言われている桜です。

それから、こちらに六角経蔵というものがあります。鳥羽上皇のお后でありました美福門院が高野山に奉納されました荒川経と俗称されています一切経を納めていた経蔵です。

こちらのほうには、三鈷の松とか御影堂が描かれています。御影堂には、真如親王という弘法大師の十大弟子のお一人がおかきになりました真如様の弘法大師の御影が秘仏として今でも祀りされているところです。

その横のほうに准胝堂がありまして、その横のほうに、孔雀堂というお堂がございます。快慶が作りました孔雀明王像が安置されていたところです。

それから、こちらの両塔の横に塔が建っていますけれども、これは、新御塔という塔です。反対の東のほうに東塔があります。これは鳥羽上皇が高野山に造られた塔です。現在の塔は、昭和になってから再建されたものです。

その横のほうには三昧堂というお堂があります。その前には、西行桜という伝承のある桜があります。その横に、後醍醐天皇のお建てになりました御願堂の愛染堂というものがあります。

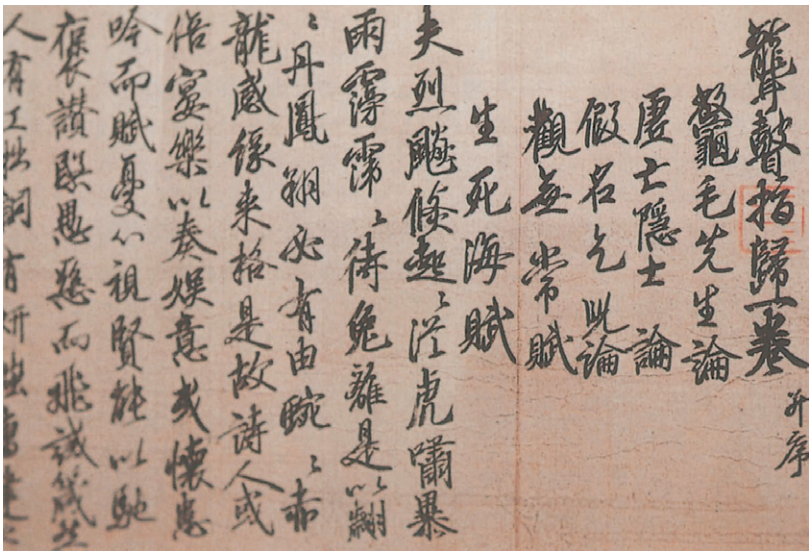
こちらのほうには、先ほど、学長さんからお話がありました、鎌倉幕府との関係があります高野山の学問所、問答などをするような場所でありました勧学院というお堂が建てられております。

このスライド画面で言えることはそれぐらいなのですけれども、それぞれの建物にはいろんな歴史をもっております。

◆

これ【スライド２】は、弘法大師空海が24歳のときにお書きになりました国宝になっております『聾瞽指帰』です。その当時、儒教・道教・仏教という三つの教えがありまして、その中で、私は仏教に基づいてお坊さんになって人々を救っていくのだ、ということを知人とか親族の人々に納得していただくためにお書きになったものなのだと言われています。

宝亀５年に弘法大師は今の善通寺市、讃岐のほうでお生まれになりまして、地方豪族の生まれなのですけれども、18歳のときに中央の大学のほうへ入って、官僚の勉強をされていたわけですけれども、それに飽き足らずに、大師は、人生目標として、なぜ生きているのか、なぜ



【スライド２】国宝　聾瞽指帰　二巻　金剛峯寺蔵

人々は死んでいくのかという疑問のなかで、生きている間に仏教の道に入って、自分自身が救われたいというような気持ちがあったのだと思います。地方豪族の子息として期待を担われて大学へ入ったのですけれども、途中で放棄をして中退をするときに知人や親族を対象にお書きになった文書です。いろいろな登場人物によって話が展開していくことから、日本で最初に書かれた戯曲風の作品とも言われています。

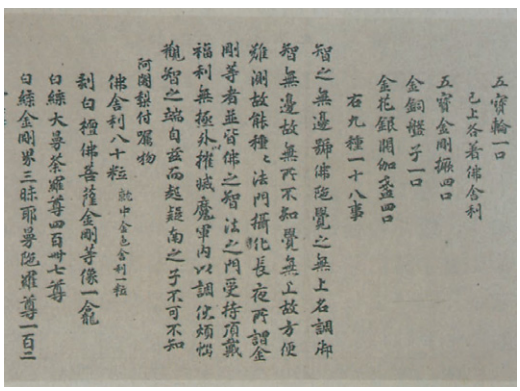
ご存じと思いますけれども、弘法大師空海は、嵯峨天皇、橘逸勢とともに、日本の三筆のお一人に数えられていますけれども、この文字を見ていただきますと、なるほどとうなずいていただけます。

実物については、特別に大学のほうからお願いがありましたので、明日、霊宝館で『聾瞽指帰』をじかに見ていただきます。中国製の紙に空罫、竹ヘラのようなもので線を入れまして、行を狂わさないように書いたものです。中国の書聖と言われております大変有名な王羲之の書法に習熟なさって、お書きになっています。24歳の若かりしころの文字ですけれども、中国人をうならせるような、達筆の書であることが、この画面を見ていただいただけでもわかると思います。

◆

弘法大師空海は、延暦23年、804年になると思いますが、中国に渡りまして、真言密教の勉強をするために求法の旅に出ます。そうして、長安の都で恵果阿闍梨から真言密教の正系の法を授かりまして、密教の第８祖の位につき、大同元年に日本にお帰りなったわけですけれども、そのときに、恵果阿闍梨さまからインド以来の正系の密教の伝授を受けて祖師になったことを証明するために、阿闍梨付嘱物というものを授与されるわけです。こちらに授けられた阿闍梨付嘱物というものが書かれてあります**【スライド３】**。

そのほか、曼荼羅とか密教にかかわるものをたくさんお持ち帰りになって、宮中のほうに報告はされているのですけれども、その『御請来目録』の中に「刻白檀仏菩薩金剛等像　一龕」というものの記録がありまして、それが次にスライドで映します国宝の「諸尊仏龕」というものに当たると言われています。インド、中国、日本という３国伝来の、祖師から祖師に伝わってきたものなのだということを、弘法大師自らが、この『御請来目録』の中にお書きになっている大変由緒のあるものが高野山に伝わっています。



【スライド３】国宝　御請来目録　一巻　京都・東寺蔵

◆

これ【スライド４】が「諸尊仏龕」です。ちょっと今回、展示はできませんけれども、今年、比叡山延暦寺と高野山金剛峯寺が共催した展覧会の「比叡山と高野山」という名宝展の中で紹介をさせていただいたものですけれども、白檀製の30センチばかりの小さな仏龕です。中国の石窟寺院の様子を参考にして作られたのではないかと言われています。中国の８世紀の作品です。

【スライド４】国宝　諸尊仏龕　一基　金剛峯寺蔵

真ん中にお釈迦さまがおられまして、その周りに羅漢さんとか声聞衆がおられます。それから、下のほうに仁王さんが配置され、横のほうには、文殊さんとか、それから普賢さんとか、そういうような脇侍仏がたくさん彫られてあります。35～36体の尊が彫られてあります。30センチの小さな仏龕の中に、丸彫に近いような彫法表現というのは、なかなか技術的に表現できないのですけれども、大変すばらしい仏龕です。

白檀の木というのは、皆さんよくご存じと思います。インド産と東南アジア産がありまして、インド産のほうが肌合いがものすごく赤いのです。どういうわけか、東南アジア産の白檀の木というのは黄色っぽいのです。そのへんが、インド産の白檀と、それから東南アジア産のものとの木の違いがあるわけですけれども、この仏龕はインド産の仏龕です。

後ほどスライドで見ていただくのですけれども、世界で一番古いなと思われる曼荼羅があります。板彫の曼荼羅なのですけれども、その板彫の曼荼羅は、どちらかというと黄色っぽい色をしておりまして、東南アジア産の白檀の木なのだと言われています。

白檀の木というのは大変大きな木に成長するのですけれども、そのまま木を使いません。１回土の中へ埋めます。成長期のところを腐らせて、真ん中の心材だけを使うのです。なかなか白檀の木というのは貴重な木なのです。香木で知られていますけれども。当時の中国の王朝にありましても大変貴重なものとして取り扱っています。

中国では檀像は、白檀の木とかそういう香木で仏さんを作られるのが普通なのですけれども、だんだん入手が困難になって代用材として桜の木を使って作られるようになっていきます。そういう意味では、この小さな仏龕というのは、木の値打ちもありますし、歴史的背景もあって、大変貴重なものだと言えると思います。

諸尊の表現というのは、インドグプタ朝時代頃の表現をされているのですけれども、この仁王さんなどの表情というのは、中国の表現で、どうもインドで作られたものでなしに、８世紀の中頃ぐらいに作られた中国製のものではないかと、専門家の中ではみられています。それにしても、現在、中国のほうで、こういうような仏龕が伝わっていません。日本にしか伝わっていません。そういう意味で大変貴重な、世界遺産に匹敵するような貴重なものと言えるものです。

◆

それから、弘法大師空海は、そういうような阿闍梨付嘱物とか、密教にまつわる様々な道具類や曼荼羅とか、絵画類もたくさん持って帰ってきておられるのですけれども、高野山に伝わっているものとして、中国の唐時代のものではないかと言われております五鈷杵とかの密教法具が８個ほど伝わっていまして、重要文化財になっております。

中には、日本で弘法大師が指導いたしまして、請来の密教法具を参考にして作らせたものも、

【スライド５】重文　密教法具の内　五鈷杵　金剛峯寺蔵

その中には含まれています。この五鈷杵【スライド５】と、それから独鈷鈴・独鈷杵というものがありまして、それらは中国製のものと言われています。ほかのものは、三鈷杵とか、五鈷鈴とか、そういうものは、中国のものを参考にして作られた平安時代前期のものではないかと言われています。

◆

これ【スライド６】は、普門院というお寺に伝わっている重要文化財の白檀製の仏龕です。真ん中の中央龕、左右の脇龕、下のほうの龕など合わせ一箱の中に納めてあるものです。実は、この下の龕の部分は、後世の人がちょっと配置を間違えまして、本来的には、この上部のほうに来るべきものなのです。そういうように部分的に込め直すのに間違った部分がありますけれども、大変すばらしい、丸彫に近い彫法の中国唐時代の作品で、重要文化財になっています。

日本でも、こういうような中国製の仏龕というのは、あまり数が伝わっていないのですけれども、先ほどの「諸尊仏龕」とともに中国の唐時代の８世紀の作品が高野山に２点が伝わっています。その一つの大変貴重な仏龕です。

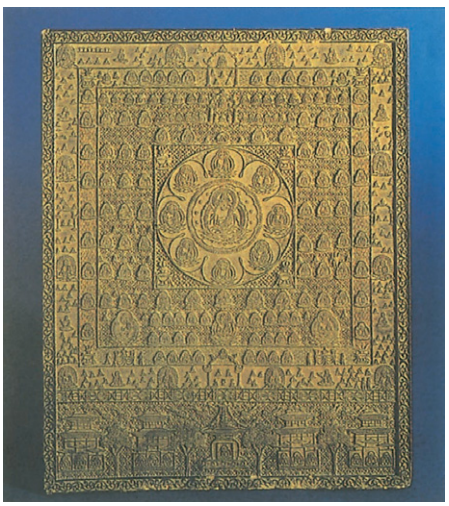
◆

先ほど、東南アジア産とインド産の白檀の木のお話をさせていただいたのですけれども、これ【スライド７】は、どちらかというと、先ほどの「諸尊仏龕」に比べますと黄色っぽいです。どうも東南アジア産の白檀の木で彫られたもののようです。この板彫の曼荼羅は、弘法大師が中国から恵果阿闍梨に授かって持って帰ってきた通称「現図曼荼羅」と言われる曼荼羅よりも、組織的には大変古い部分があります。

天台宗の円珍さんが、弘法大師のあと、唐時代の末にあたりますけれども、中国に行かれまして、より弘法大師よりも古いかたちの曼荼羅を求められました。その中に、善無畏さんが製作した胎蔵大曼荼羅の図像を写されて帰ってきています。その図像を「胎蔵図像」と名前がつけられています。さらに「胎蔵旧図様」というものも写されていますけれども、それの仏さんの表現にこの曼荼羅の諸尊が大変近いものがあります。「現図曼荼羅」といいますのは、たくさんの手をもった表現の仏さんが多いのですけれども、この板彫の曼荼羅では二臂の像が多いのです。人間の体つきと同じような形の尊像が大変多く彫られています。

ただし、この曼荼羅の中で、真ん中の中台八

【スライド６】
重文　釈迦如来及諸尊像　一基　普門院蔵



【スライド７】
重文　板彫胎蔵曼荼羅　一枚　金剛峯寺蔵

葉院のところに、大変特殊な円が彫られてあるのです。これは、「胎蔵図像」も「胎蔵旧図様」も「現図曼荼羅」にもない要素です。霊宝館で後ほどもう一面の中国製の板彫曼荼羅を見ていただくのですけれども、そういう曼荼羅を見比べていきますと、中国で伝わっていたものが、どうも同じ曼荼羅というものはありません。本来曼荼羅は阿闍梨が修法をするたびに作ったものであって、基本的な組織は変わりませんけれども、仏さんの配置とかそういうものはどんどんどんどん変わっていって、何一つ同じものがなかったのではないかと思われます。

だから、そういう意味では、弘法大師空海が持って帰ってきた「現図曼荼羅」というのも、曼荼羅の中の一つのある時期の曼荼羅であったのではないかなというのが私の気持ちです。そういう背景を伺える大変貴重な中国製の板彫の曼荼羅です。

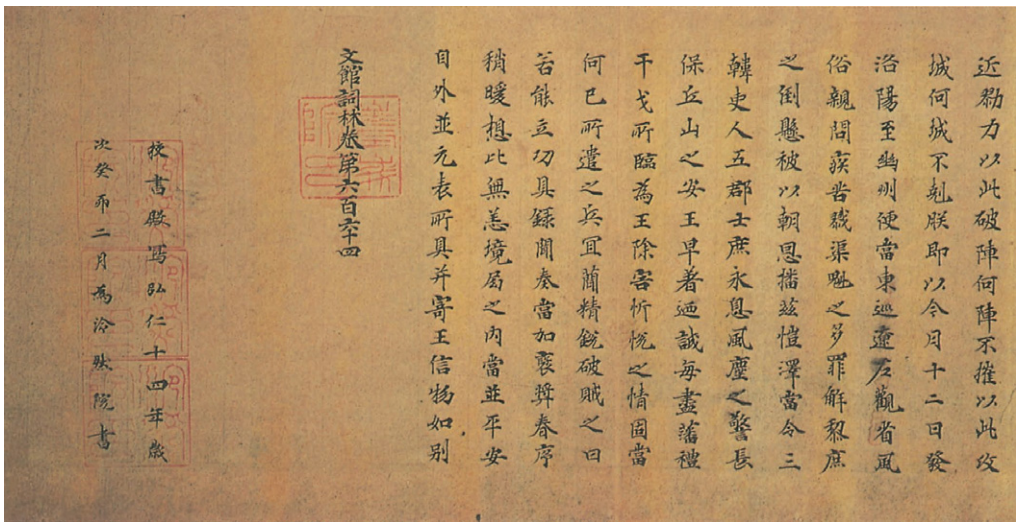
昔は、一般の研究者は、これは印仏、ハンコを押したときのものではないかなと、通常一般に言われていまして、論文とか展覧会の図録などで、印仏なのだといって、よく紹介はされていたのですけれども、よく見ていただけば、何も墨の跡はありませんね。印仏に使う場合には、尊像を反対に表現しないといけないのです。でないと、判を押したときに通常の仏さんの姿形にはならないのです。左右が逆転してしまいます。そういう意味で、明日見ていただきますけれども、もう１面の桜で作られたこういう同じ板彫曼荼羅の後ろのほうに取っ手が付いていまして、その用途は密教の灌頂の道具に使っていたものではないかと思われます。

現在、中国で行われておりました灌頂という儀式の方法論、どういうような内容のものが行われていたのか、どういう道具で行われていたのか、というのがわからない部分があります。どうも胎蔵界の曼荼羅だけが残っているので、そういうような取っ手が付いているもので、胎蔵界に基づいたような受明灌頂に使われたものの道具ではないかなと思われます。

この板彫の曼荼羅の後ろのほうに、平清盛とか平家一門、安徳天皇など諸々の人々が結縁した名前の墨書があります。どうもずうっと調べていきますと、和歌山県の南のほうにあります熊野信仰で栄えました那智山のほうにおられた、真言系統の念仏聖の人がこういうものを日宋貿易で手に入れて、いろいろな所へ訪ねていき、結縁寄進を得ていた一つの証拠的な内容を含んでいるようです。この曼荼羅は、鎌倉時代の初め頃に、高野山の弘法大師のお御影がお祀りされております御影堂に奉納をされております。そういうような歴史的なことが、１枚の板の曼荼羅からいろいろなことがわかってきます。

◆

これ**【スライド８】**は、実は嵯峨天皇の手元にありました大変貴重なものです。「文館詞林」という国宝になっているものです。正智院というお寺に伝わっておりますものなのですけれど



【スライド８】国宝　文館詞林　正智院蔵

も、こちらのほうに嵯峨院のハンコがペタペタペタペタと押してあります。弘仁14年という年号の奥書がありますけれども、弘仁14年に、中国から輸入した「文館詞林」というものを写したもののようです。実は、この後ろのほうに、天台の僧侶が写経をした「法華相対抄」というものが写経されたものが残っております。だから、どうも嵯峨天皇の手元から直接に高野山へ伝わったものではなしに、天台のお坊さんが一度手にして、そのうち高野山のほうに持ってこられたものなのだと考えられます。

「文館詞林」というのは、中国の漢時代から唐時代の漢詩集を1,000巻にまとめて作った漢詩集の詩文集なのですけれども、現在、中国に残っておりません。もう唐時代の終わり頃、宋の初め頃には、それが散逸してしまってわからなかったと言われています。日本のお坊さんが初めて「文館詞林」というものがあるのですよということを中国の人に教えたという話が伝わっています。

現在、正智院に12巻、それから宝寿院に１巻、それから、宮内庁書陵部に１巻だけ残っています。だから、高野山に13巻あるのです。これらは、分巻されていたものを１巻にまとめてあるので、正智院のものは17巻分が残っています。宝寿院のものは２巻分が残っているのです。大変貴重なもので、江戸時代にまぼろしの書「文館詞林」の一部が高野山にあるということで、木版にされて印刷された経緯もございます。大変貴重な存在の「文館詞林」です。

【スライド9】
重文　木造大日如来坐像　一躯　金剛峯寺蔵

◆

この仏像**【スライド９】**は、９世紀の終わり頃の作で、高野山の現存しております仏さんの中で一番古い仏像の大日如来像です。たまたま国の指定のときに西塔のほうで安置をされておりましたので、「西塔の大日如来」という名前が付けられています。檜の一木造りの大変ボリューム感のある仏さまで、平安時代の貞観仏の一つの特色であります森厳な感じのします雰囲気を漂わせているものです。仁和年間ぐらいに作られたものではないかと言われている大変貴重なものです。

◆

この舎利器**【スライド10】**は、高野山大学の人でも見たことがなかったと思います。実は、平成元年に、弘法大師のあとを継いだ高野山の第２世真然僧正のご遠忌がありましたが、その記念事業として金剛峯寺の裏山にあります県指定の真然堂を解体修理することになって、その土壇をどういうような状態になっているのか確認するためにトレンチを入れましたところ、こういう真然さんのお舎利が入った舎利器が出てきたのです。

平安時代、９世紀の終わりぐらいの作品なのだと言われていますけれども、官立の窯で造られたものです。その当時、こういうような釉薬のかかった陶器というのは国が管理していまして、国が組織しております官立の窯でしか焼かれなかったのです。勝手に民営で焼くことができなかったのです。どうもこの色や形からみて愛知県の猿投の官立の窯で焼かれたものだと言われております。四足、四つの足をもっているものです。普通、こういうような焼物は地下に埋められてあっても、たいてい壊れてしまって、なかなか完形のような形で伝わらないのが普通なのですけれども、ほとんど完形の状態で伝わったものなのです。

【スライド10】
(再埋納)緑釉四足壺　一合　金剛峯寺蔵

そういう意味で、

掘り上げた段階で、国が直ちに「国宝に指定しましょう」と言われたのですけれども、高野山では、弘法大師の跡を継いで苦労されて、高野山の一つの一大伽藍を完成させた真然さんの遺徳を偲びまして、やはり信仰的な意味もあって、再度元の位置に戻してあげようということになりまして、複製と報告書がつくられ、現物は現在、真然堂の下に再埋納をさせております。国宝に匹敵する舎利壷がもう一度地下のほうに安置されたわけです。

◆

この像【スライド11】は、「波切不動」という重要文化財になっています不動明王立像です。南院というお寺に伝わっておりまして、弘法大師にいわれがあります。

伝承といたしましては、弘法大師空海が中国からお帰りになるときに、恵果さんから命じられまして不動明王をお彫りになったのだと。そうして帰国の航海中、難破しそうになったので、このお不動さんに祈念をいたしますと波が平穏になり、無事に帰国することができたという伝承があります。

記録的にみますと、もともと京都に弘法大師がお住みになっておりました高雄の神護寺、そこに伝わっておりまして、さらに方々を転々といたしました。熱田神宮から、高野山の伽藍にございます山王院というところに持ってこられまして、さらに山王院から南院に移ったと言われている伝承のあるものです。

一般的な美術史の世界の中では、どうも日本に伝わっているお不動さんの姿とちょっと違うので、衣の下のほうの表現とかそういうものから比べると、平安時代の中期ぐらいの作品ではないかと言われているのですけれども、実は、上のほうに漆がかぶっていまして、足のうら白木のままなのです。材質が中国製の、目のつんだ桜材で作られているので、私たちが考えているのは、伝承どおり中国で作られたもの、弘法大師が彫ったかどうかはわかりませんけれども、中国の仏さんである可能性も秘めていると思われる大変貴重な不動明王像です。

◆

それから、こちら【スライド12】のほうは高野山で一番古い不動明王像です。檜の一木造りで、10世紀の初め頃に作られたものではないかと言われているものです。大変ボリューム感のあるお不動さまのお姿です。通常、お不動さんのお姿というのは、片目をギョロッと見開き、片目を伏せており、「上求菩提下化衆生」という言葉を表現したものと言われています。そういうお顔をされているお不動さんをよくご存じだと思いますけれども、古いお不動さんの形は、両目をカッと見開いております。通称、弘法大師様という、弘法大師空海が中国から伝えた不動明王の顔の表情に大変近いものがあります。

先ほどから申し上げました片方の目を開けて、片方の目を伏せている姿形というのは、10世紀に天台宗の安然という人と、それから真言宗の淳祐という人が、時を同じくして、お不動さまの十九相観というものが説かれました。お不動さまのお姿を思い浮かべていく方法、観想の仕方を説くものですけれども、そこに出てくるお

【スライド11】重文　木造　不動明王立像　一躯　南院蔵

【スライド12】重文　木造不動明王坐像　一躯　正智院蔵

不動さんのお姿が、それ以降、一般的になっていきます。

この像は、十九相観によらない大変古い形を伝えているお不動さまなのだということがいえる像です。正智院というお寺に伝わっています重要文化財の像です。

◆

これ【スライド13】は、先ほど一番最初の頃に申し上げたのですけれども、応徳３年(1086)に製作された涅槃図です。高野山の文化財の中でも超一級のものです。世界遺産に匹敵するような、日本の文化を語るのに欠かせない有名な国宝の「仏涅槃図」です。

お釈迦さまの涅槃図といいますと、２月の15日に涅槃会(常楽会)という法会が行われるのですけれども、その本尊さんとして安置をされ、お釈迦さまの遺徳を偲ぶために掛けられ、お祀りをされてきたものです。

真ん中に、お釈迦さまが宝台の上に横たわっております。周りのほうに、お釈迦さまのお弟子さんとか、仏教信者とかさまざまな人々、それから、こちらのほうに『法華経』で出てくるいろいろな登場人物とか、そういうものが描かれております。

下のほうには獅子が１匹かいてあります。皆さん、涅槃図をご覧になったことがありますか。方々のお寺によく伝わっておりますので見ていただきますと、いろいろな動物や、江戸時代になりますと虫までかいてあります。いろいろな動物とかそういうものがたくさん画面の中に導入をされている涅槃図をご覧になることが多いと思います。鎌倉時代以降の涅槃図というのは、比較的、動物とか虫とか、そういうものが盛んにかかれるようになっていきます。お釈迦さまの遺徳を偲ぶために、世の中のすべてのものが嘆き悲しんだという表現を具体化するために動物とか虫とか様々なものが画面の中にかかれるようになっていきますけれども、中国の敦煌のあたりの、涅槃図などを見ていきますと、やはりこの絵と同じように、獅子１匹だけが描かれてあるものが大半です。だから、この図も、中国の古い画像を基にしてかいているように思います。

ただ、お釈迦さまの寝方です。普通、右手を膝枕にして横になって寝るのが普通なのですけれども、このお釈迦さまは、日本人と同じように上を向いて寝ているのです。どうも日本人的な感覚のなかで作られたものではないかなと言われています。この彩色そのもの自身も大変中間色が多く使われて、日本の自然の風景の中で彩られた様々な色に近いものを盛んに彩色として使われています。この図の表現は日本の文化を語るうえで、また、平安文化というものや日本人の自然観を知るための手掛かりになるのではないかという内容も含む大変すばらしい涅槃図です。

◆

これ【スライド14】が上のほうの画面です。山水がかいてありまして、このへんに沙羅双樹が２本分かれて、２本が花が咲いております。それぞれ顔は個性的であります。

ただし、鎌倉時代以降の涅槃図といいますと、

【スライド13】国宝　仏涅槃図　一幅　金剛峯寺蔵

【スライド14】国宝　仏涅槃図　部分１

【スライド15】国宝　仏涅槃図　部分２

【スライド16】国宝　仏涅槃図　部分３

お釈迦さんが亡くなるので、大変慟哭をして嘆き悲しんでいる激しい泣き方をした表現のものが普通なのですけれども、この絵は、どちらかといいますと、押し殺したような静寂の中の悲しみというものを実によく表現をしています。平安時代には、あまり極端な慟哭表現ではなしに、静かな感じの中に寂というものをこの画面の中に生かそうと画家は考えたのではないかと思います。

◆

これ【スライド15】も同じ下のほうの画面です。大変個性的人物表現がみられます。このような短冊型には尊名が全部書いてあるのです。この涅槃図の情景は、『法華経』などに説かれています涅槃の世界を参考にしていると言われています。

◆

お釈迦さまの着衣のところ【スライド16】に金箔を細く切りまして、いろいろな美しい截金模様が付け加えられています。また、その肌の色は、薄い黄色をしています。この色は、ガンボージという染色顔料で彩色されてあります。大変柔らかい感じの黄色の色が見受けられます。

◆

これ【スライド17】は、久安３年、天台宗の園城寺(三井寺)の画僧でありました定智という人が高野山のためにおかきになりました「善女竜王」というものです。金剛峯寺に伝わり国宝になっているものなのです。

「善女竜王」といいますと、天長２年だったと思いますけれども、弘法大師が旱魃で苦しんでいる人々のために、神泉苑という所で雨請いをされました。雨請いをされると、愛宕山の方向から竜王さんが現れまして、にわかに雨を降らして旱魃から民衆を救ったという伝承があるのですけれども、その伝承をもとに善女竜王の姿をおかきになったものです。

◆

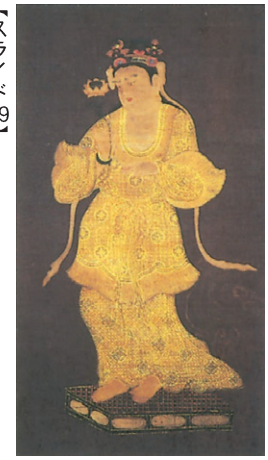
これ【スライド18】は国宝になっています。勤操大徳という、高野山の普門院というお寺に伝わっているものです。平安時代、だいたい似絵といますと、鎌倉時代に神護寺に伝わっている頼朝像とか、そういう武将の姿が残っています。似絵は対象人物にできるだけ近い姿を描き、その人間のもっている性格というものをも表現する表現絵で、鎌倉時代に普及しますけれども、この絵は、それよりも少し前、平安時代12世紀の前期に中国の似絵の技法を参考にしてかかれたのではないかと言われている国宝の「勤操大徳像」です。

これも、もともとは奈良県の吉野の天川村の求聞持堂というお堂にもともとあったものなのです。ここに銘文があるのですけれども、室町

【スライド17】
国宝　善女龍王像　一幅　金剛峯寺蔵

【スライド18】
国宝　勤操大徳像　一幅　普門院蔵

【スライド19】
国宝　伝船中湧現観音像　一幅　竜光院蔵



時代以降に高野山にどうも移されたもののようです。上のほうには、弘法大師が勤操大徳のために追悼文を書いているのです。『性霊集』に残っておりますけれども、その文章を写したものが書かれてあります。

◆

これ**【スライド19】**は「伝船中湧現観音像」といいまして、竜光院に伝わっています。平安時代の12世紀に作られました国宝の絵です。「伝船中湧現観音像」は、弘法大師が中国からお帰りになるときに、荒れる波を観音さまに祈念して、静かな波に変えたという伝承があります。大変変わった観音さまです。この衣のところ、先ほどの涅槃図と同じく、金箔を細く切って模様にした截金模様があります。実に美しく大変工芸的な趣向に富んだものです。

◆

これ**【スライド20】**は、先ほど、清盛の話を学長さんがされていましたけれども、平清盛が高野山に奉納いたしました「血曼荼羅」というものです。『平家物語』に出てきます大変由緒のある、大変貴重なものです。金剛界と胎蔵界の曼荼羅の一対のもので、高さがだいたい５メーター50ほどあります。横が５メーターぐらいあります。一幅約60キロほどある大変大きな曼荼羅です。

ご存じと思いますけれども、こういう曼荼羅で一番古いものといいますと、高雄の神護寺に伝わっている国宝の、金と銀でかいた曼荼羅がありますけれども、彩色の曼荼羅で、弘法大師が中国から持って帰ってきた「現図曼荼羅」の系統の中で、現存している中では時代的には一番古いものです。この曼荼羅の仏さまの表情は、高雄の曼荼羅の図像を写しています。

そういう意味で、由緒やあるいは物語に出てくる伝承とは別に、「現図曼荼羅」の彩色品として最古の曼荼羅ということで、大変貴重な重要文化財の曼荼羅です。残念ながら、ずうっと使っておりましたので、彩色などが退色しているのが残念なのです。

◆

これ**【スライド21】**は金剛界のほうです。先ほどは胎蔵界、こちらが金剛界の曼荼羅です。

◆

これ**【スライド22】**は、平安時代の中期、12

【スライド20】
重文　両界曼荼羅図(血曼荼羅)
二幅の内(胎蔵)　一幅　金剛峯寺蔵

【スライド21】
重文　両界曼荼羅図(血曼荼羅)
二幅の内(金剛界)　一幅　金剛峯寺蔵

【スライド22】
重文　阿弥陀浄土曼荼羅図　一幅
西禅院蔵

世紀の作品、西禅院というお寺に伝わっています重要文化財の「阿弥陀浄土曼荼羅図」です。阿弥陀さまの極楽浄土の世界をかいたものです。なかなか平安時代のこういう極楽浄土の情景をかいたものというのは残っていないのです。奈良の国立の博物館に、同じような形のものが１点ありますけれども、そのほか、「智光曼荼羅」とか「当麻曼荼羅」とか、奈良時代の古い曼荼羅があって、鎌倉時代に「当麻曼荼羅」がたくさん作られるようになりますけれども、平安時代のこういう浄土図としては大変貴重な存在で、重要文化財になっているものです。

◆

この像【スライド23】は、平安時代の終わりの久安３年に、藤原摂関家が高野山に金剛心院というお寺を造られ、そのお寺に二つの塔が造られました。どうも胎蔵界の世界を表します多宝塔と、それから、金剛界の世界を表します多宝塔の２塔を造られたようですけれども、その中で、金剛界の五仏を安置しておりました塔の尊だけが現在残っています。五尊を本来はお祀りをされていたようですけれども、阿閦如来と宝生如来という２像が焼けてなくなっています。あと、この大日如来と、お釈迦さま、阿弥陀さまの３躯が残っています。

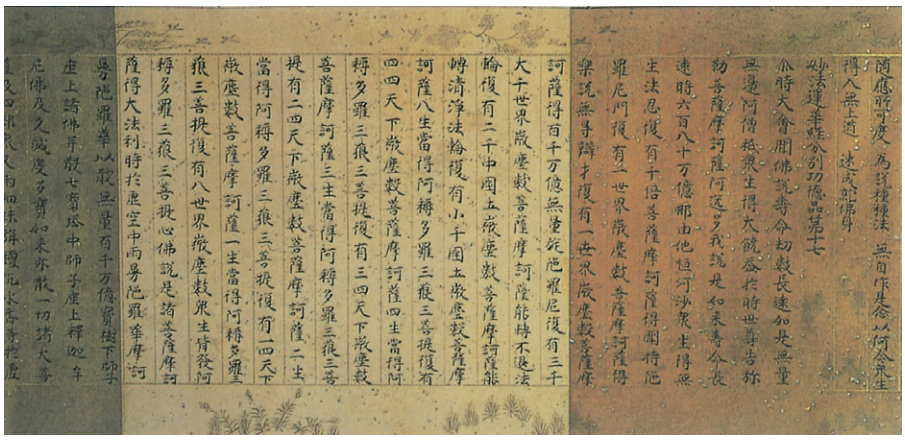
【スライド23】重文　大日如来坐像　一躯　金剛峯寺蔵

あす、十分説明する時間がないかもわかりませんけれども、陳列館のほうに安置しておりますので、ご覧いただけたらわかりますけれども、火をかぶった跡があるのです。この黒くなっているところは火がかぶっています。どうも金箔が焦げてしまった部分のようです。

この大日如来さまのお顔をご覧になっていただきますと、臼杵の石仏で、今は修理されておりますけれども、顔が落ちておりました大日如来のお顔に大変近いのです。作者はどうも同じではないかと言われています。康助という仏師が作った作品ではないかと専門家の中ではみられている大変貴重な、平安時代の終わりぐらいの作品です。

◆

これ【スライド24】は国宝の「色紙法華経」と言います。いろんな色の紙をつなぎ合わせて『法華経』を書いていってあります。もともとは『法華経』全巻が伝わっていたのだと思いますけれども、たまたま、この１巻のみが伝わっております。これと共巻であっただろうなとい



【スライド24】国宝　色紙法華経　一巻　金剛峯寺蔵

うのが愛知県のほうで見つかっています。

◆

これ【スライド25】は「金銀字一切経」というお経です。国宝になっています。このお経はもともと平泉の中尊寺に伝わっていたお経です。現在、4,296巻が高野山に伝わっています。本家本元の平泉の中尊寺のほうに15巻、最近１巻お買いになりまして、16巻になっているのですけれども、藤原３代の初代清衡が中尊寺に奉納するために作らせた『一切経』です。もともと5,300巻ほど作られたようですけれども、現在、高野山に4,296巻と、中尊寺に16巻と、観心寺などにも伝わっています。

金と銀で交互にお経の文字を書いてあるのが、この『一切経』の一つの特色です。東北は金とか銀の産地だったのです。だから、ふんだんに金と銀というものが手に入るものですから、そういうような文化というのが育っていきます。その名残として、中尊寺へ行かれますと金色堂があります。金箔を貼った大変荘厳な感じのします小さなお堂で藤原３代のミイラがお祀りされているお堂です。大変質の高い平泉文化を語ることのできる一切経です。

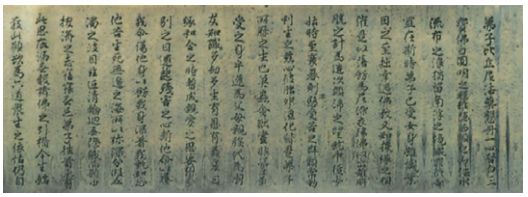
【スライド25】
国宝　金銀字一切経　四、二九六巻の内　金剛峯寺蔵

◆

実は、これ【スライド26】も将来国宝になるべきものだと言われているのですけれども、奥の院の弘法大師の御廟のそばに、比丘尼法薬という人が、『法華経』とか、いろいろな絹の上にかいた曼荼羅とか、そういうものを合わせて、弘法大師の御廟のそばに埋められた埋納経です。この経筒が昭和40年に発見されました。

【スライド26】
重文　比丘尼法薬埋納経　一具(経筒)　金剛峯寺蔵

◆



【スライド27】重文　比丘尼法薬埋納経の内(願文)

その中から、比丘尼法薬さんがお書きになりました願文が出てきました。これ【スライド27】が願文です。普通、こういうような経塚遺物というのは、紙のものとかそういうものは腐ってしまうのが普通なのですが、弘法大師のおかげというのか、お守りをされていたというのか、腐らずに、その当時の状態に近いような情況で出土しました。その当時の弘法大師信仰の様子や、それから、阿弥陀、弥勒浄土信仰というものが、この願文の内容でわかります。願文の内容は、私は、いろいろなかたちで仏教の信仰をもって、さまざま作善の事業、お経とか仏像とか、そういうものを一生涯かけて作ってきました。私は、弥勒仏が下生されます56億7,000万年後に説教されるときに、私が写経したお経をもってその法会に参加をしたい。それまでの間、弘法大師、お願いですから私のお経を守ってください、ということを切々と書かれてあります。

その当時の人々の信仰の情況を直接お書きになっているので、心がよく伝わってくる内容の、大変すばらしい願文です。

◆

これ【スライド28】は、平安貴族が高野山に奉納した唐櫃です。たぶん、先ほどのような「色紙法華経」とか、そういう『法華経』の装

【スライド28】
国宝　螺鈿蒔絵小唐櫃　一合　金剛峯寺蔵

【スライド29】
国宝　金剛峯寺不動堂　一棟　金剛峯寺蔵

【スライド30】不動堂(堂内)

【スライド31】国宝　八大童子立像群　金剛峯寺蔵

【スライド32】
重文　木造不動明王坐像　一躯
金剛峯寺蔵

飾経を入れて、高野山に奉納したのではないかと思われるものです。カキツバタとか、それから千鳥とか、水辺の自然の情景を工芸的にデザイン化されたもので、平安文化を語るうえで欠かせない、高尚な感じのします、すばらしい螺鈿の蒔絵の小唐櫃と言われています。金剛峯寺の国宝になっている螺鈿の小唐櫃です。

◆

これ**【スライド29】**は、現在、来年の９月で完成するのですけれども、３年計画で解体修理をしております国宝の不動堂です。建久８年に、行勝上人が八条女院の援助を得ましてお建てになったと伝えられておりますお堂です。実は、解体修理をしている過程のなかで、年代的には建久８年まで、お堂そのもの自身は上がらない。建立実年代としましては、鎌倉時代の中期ごろのものではないかと言われております。

◆

これ**【スライド30】**がお堂内の様子ですが、この須弥壇の上に、運慶の作った、教科書などによく出てきます八大童子が安置されていたのです。

◆

これ**【スライド31】**が須弥壇の上に安置をされていた状況を私たちが再現をしたものです。『不動明王八大童子秘要法品』というものを根拠にいたしまして仏像が作られています。

◆

これ**【スライド32】**が中尊の不動明王です。これは行勝上人の念持仏という伝承があります。重文になっている平安時代末期のお不動さまです。彩色などは、その当時の状態のものが残っています。

◆

これ**【スライド33】**が運慶さん。切手になったことがあります。制吒迦童子像です。美男子の青年の姿をした、凛々しい感じのします童子像が表現されています。静岡に願成就院という

【スライド33】八大童子像の内　制吒迦童子像

【スライド34】制吒迦童子像　部分

お寺がありますけれども、そこにも、運慶さんのこういうような制吒迦童子像とか、矜羯羅童子像があります。その像は丸々とした赤ちゃんのような感じがします。大変張りのある肉身表現なのですけれども、その姿に比べ青年像の表現で運慶さんが製作した制吒迦童子像です。像内のほうに月輪形の銘札という、運慶さん独特の銘文を書いた杓文字形のような感じの銘札が中に込められているのがＸ線の撮影で確認できています。

◆

これ**【スライド34】**が制吒迦童子像の上半身。いかにも美男子という感じで作られてあります。おなかのほうの肉身の張りのある表情とかそういうものも、人間の体をずいぶん研究なさって写実的に彫られたのだと思います。日本を代表する彫刻の一つです。

◆

これ**【スライド35】**も運慶さんの作品です。矜羯羅童子像。現実におられるような写実的な顔をしています。展示しますと、「誰々に似ているね」と見ている人がよく談笑されるぐらいの、大変すばらしい写実的な表現が見られます。

◆

【スライド35】矜羯羅童子立像

【スライド36】清浄比丘立像

これ**【スライド36】**は清浄比丘という童子さまです。ちょっと薄べったい感じで、先ほどの運慶の童子に比べますと、衣の表現とかそういうものが、やや平面的な感じのするものです。専門家の中では、快慶が作ったのではないかと言われています。

【スライド37】恵光童子立像

◆

これ**【スライド37】**は恵光童子です。これも同じように、やや平面的な感じがします。運慶の先ほどの制吒迦童子像などに比べますと、少し表現ニュアンスが違う快慶作かなあという感じがします。

◆

これ**【スライド38】**は恵喜童子という童子さんですけれども、これは、先ほどの運慶の作品とか、快慶ではないかと言われている２体の像から比べますと、やや胴長で、ちょっと全体的なバランスが異なる雰囲気があって、これは運慶・快慶と違う仏師が作ったのではないかと言

【スライド38】恵喜童子立像

【スライド39】烏倶婆誐童子立像

【スライド40】指徳童子立像

【スライド41】阿耨達童子像

【スライド42】重文　木造四天王像　四躯の内(広目天像)　一躯　金剛峯寺蔵

【スライド45】重文　阿弥陀如来立像　一躯　光台院蔵

【スライド44】
重文　阿弥陀三尊立像　三躯　光台院蔵

【スライド43】
重文　孔雀明王坐像　一躯　金剛峯寺蔵

われています。

◆

これ【スライド39】は烏倶婆誐童子像です。これも少し表現が違うので、彫刻史の世界では、ちょっと運慶とか快慶作と異なる、慶派仏師の中の弟子筋の作品ではないかなあと言われています。

◆

これ【スライド40】は、八大童子の中で２体だけ、どういうわけか、壊れたのか何かはわからないのですけれども、新しく鎌倉時代の中期頃に作られたものです。先ほど、不動堂のところで、実年代は鎌倉時代の中期頃と解体修理でだんだんわかってきていますよと言ったのですけれども、どうも本来の八大童子がお祀りをされておりました本堂が、何かの事情がありまして現在の建物に変えられた段階で、この像を新しく作り直されたのではないかなあと思われている指徳童子という像です。

◆

これ【スライド41】も、同じように、新しく鎌倉時代の中期頃に作られました阿耨達童子です。龍に乗っておられまして、大変変わった表現の像です。なかなかこういうような表現の仏像というのはない貴重な作品です。

◆

これ【スライド42】は快慶の作品です。重文の「四天王像」です。高野山から東大寺の大仏殿の再建にかかった大勧進職を務めました重源が、高野山で結んでおりました専修往生院という念仏別処にあったものではないかと言われているものです。『南無阿弥陀仏作善集』という重源さんが自らお書きになりました中に出てくる真別処の四天王ではないかと言われています。

足のほどのところに「安阿弥快慶」という銘文があります。快慶の忿怒表現の作品というのは、あまり残っていないのです。快慶さんというのは、どちらかといいますと、阿弥陀さんとか、観音さん、勢至さんというような優しいお顔をした仏さんをたくさん作られ現存していますけれども、こういうような四天王というのは比較的残っていません。かろうじて、記録では、奈良の東大寺の大仏殿のところに広目天像を作ったという記録はあるのですが、現在残っていません。そういう意味で、快慶さんの四天王の様子を窺うために大変貴重な像なのです。

◆

これ【スライド43】も快慶さんの作品です。正治２年、1200年なのですが、一番最初に、高野山の伽藍の景色を説明しましたときに出てきました孔雀堂というお堂の本尊さんとして作ったものです。孔雀堂というのは、後鳥羽上皇が御願の堂として造られたのです。そこに、快慶さんに依頼をしまして、こういう孔雀明王像を作られたわけです。

一般的には、雨請いのためのお堂として造られたのだと言われていますけれども、歴史的にいいますと、後鳥羽上皇は、鎌倉幕府に謀反を起こしまして、「承久の変」を起こし失敗され流されてしまうわけですけれども、そういうような討幕運動を盛んに行われていた関係がありまして、ひょっとしたら、この孔雀明王法の中に調伏の法というのもありますので、そういう意味も含んで、高野山にお堂を造ったのではないかと思われます。

通常、もともとあったものを再建するのだったらいいのですけれども、新しくお堂を造られるときに、弘法大師空海が考えた伽藍の壇上の中にそういうお堂を造ること自身が、大変不思議な部分があるのです。人々はそれを避けてきた部分があるのですけれども、後鳥羽上皇だけは、わざわざ孔雀堂というお堂を造らせた。その背景に、どうも歴史的に隠された何かがあるかもわかりません。

◆

これ【スライド44】は、光台院というお寺に伝わっているものです。道助法親王さんがお造りになった光台院の本尊として「阿弥陀三尊」を快慶さんが作っています。京都の三千院へ行かれますと、お座りになった三尊像、来迎のお姿をしたものを見かけると思いますけれども、どうもこういうような立像で、脇尊の観音・勢至が、腰を屈めて表現されるというのは、快慶

さんが作り出した阿弥陀三尊像の一つの表現ではないかなとみられています。

五坊寂静院というお寺にも、同じような姿形のものが、快慶の弟子筋が作った同じ姿の像が残っております。

◆

これ【スライド45】が、先ほどの「阿弥陀三尊」の中尊のお姿です。大変すばらしいですね。衣の流れとかそういうものが、実に整った感じの姿です。後世「安阿弥様」と言って、世の中に快慶さんの阿弥陀さんの姿をもとに盛んに作られるのですけれども、その有名になった快慶さんの安阿弥様の最たる阿弥陀さんの基本的なお姿をしている、重要文化財になっています光台院の「阿弥陀三尊」の中の本尊さんです。

◆

これ【スライド46】は、「普賢延命菩薩像」と言いまして、密教の延命修法に使われた鎌倉時代13世紀の正智院に伝わっています仏画です。「普賢延命法」という修法の本尊として描かれたものです。

◆

これ【スライド47】も、鎌倉時代の中期ぐらいのもので、高野山の弘法大師の住坊であった中院の竜光院という所に伝わっております伽藍御影堂の真如親王様の弘法大師のお御影を写された鎌倉時代の「弘法大師像」です。伽藍の御影堂へお詣りしていただきましても、真如親王様が描かれた御影はご覧になっていただけません。真言宗のお坊さんでも、一生に一度だけしか拝めない大変貴重なものです。その伝統のあるお御影を写したものと言われているものです。

【スライド47】弘法大師像　一幅　竜光院蔵

◆

これ【スライド48】は、日本の三大不動と言われています高野山の「赤不動」です。三大不動といいますと、三井寺の黄不動、青蓮院の青不動、そして、高野山の赤不動と言われています。

天台宗の円珍さんが葛川で修行中に感得した像なのだという伝承があります。そういう伝承がありますので、もともとは比叡山のほうに伝わっていったものなのだと思いますけれども、近世になって突然、「赤不動」という名前がしきりに文書の中に出てきますので、江戸時代初頭頃に高野山に移されたものであるのかもしれません。そういう意味では、元比叡山にあったものが転々として、高野山に伝わってきたものではないかと思います。

◆

これ【スライド49】は、弘法

【スライド46】重文　普賢延命菩薩像　一幅　正智院蔵

【スライド48】重文　不動明王二童子像(赤不動)　一幅　明王院蔵

大師が一番最初に行われました大仁王会という儀式の法要を、高野山の政所であった紀の川のほとりにあります九度山の慈尊院でおこなわれましたが、そのときの大仁王会の本尊さんの伝統を受け継いでいると言われております。鎌倉時代に描かれました重要文化財になっています「五大力菩薩像」というものです。

「五大力菩薩像」といいますのは、旧訳の『仁王経』に説かれています仏さまです。新訳『仁王経』による五大明王は、東寺などに現存しているように盛んに作られるわけですけれども、高野山の場合はどういうわけか、仁王会は旧訳に基づいた「五大力菩薩像」が本尊として祀りされていたようです。

だから、これとは別なのですけれども、普賢院というお寺に、重要文化財になっています白描の「五大力菩薩像」があります。普賢院の像は、もともとは大阪の住吉大社の神宮寺に伝わっていたものなのですけれども、その白描図像が江戸時代に高野山に移されて、現在、重要文化財になっています。どうも高野山の古い伝統に基づいて行われている法要のところに、ほかで使われなくなった五大力菩薩像が江戸時代の頃に奉納されて、高野山に伝わってきたような経緯があるようです。

◆

これ**【スライド50】**は、寛元２年という年に、醍醐寺に胎蔵界の大日如来像を、高野山には金剛界の大日如来像が開眼されて納められたと言われています。重要文化財の「大日如来像」の画像で鎌倉時代のものです。

◆

これ**【スライド51】**は、南北朝時代、奈良の絵仏師祐円という人が、高野山から依頼を受け描かれたものです。どちらかといいますと水墨画タッチの感じです。山水のところに滝が流れていまして、岩のところにお地蔵さんが描かれております。実に優しい感じのしますお地蔵さまのお姿をしています。仏画で絵仏師の名前がわかるものというのはほとんどないのですが、そういう意味では、南都系の絵仏師の祐円が描いたものが高野山に伝来する珍しいもので、宝寿院というお寺に伝わっている重文の仏画です。

◆

これ**【スライド52】**は、鎌倉時代以降、南北朝時代ぐらいになりますと、縁起絵巻物が各所で多数作られますが、この絵巻きは、弘法大師信仰を背景に製作された弘法大師伝の６巻本のものです。地蔵院というお寺に伝わっております重文の「弘法大師行状図画」といいます。弘法大師伝絵巻で、現存している一番最古の絵巻ではないかと言われている中の遣唐使船の部分で、延暦23年に弘法大師空海が中国に渡っていくときの遣唐使船の様子を描いたものです。

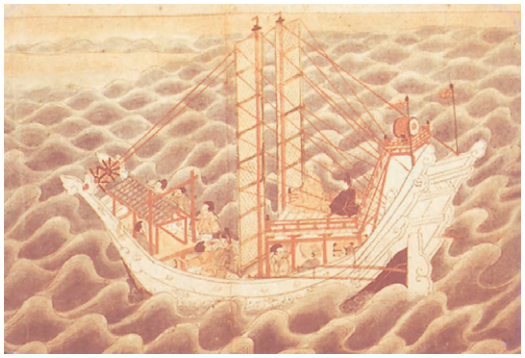
◆

これ**【スライド53】**も、同じ地蔵院の「行状

【スライド49】重文　五大力菩薩像　一幅　北室院蔵

【スライド50】重文　大日如来像　一幅　金剛峯寺蔵

【スライド51】重文　地蔵菩薩像　一幅　金剛峯寺蔵



【スライド52】重文　高野大師行状図画　地蔵院蔵

【スライド53】高野大師行状図画　部分

図画」の中の１場面で、弘法大師が入定なさって奥の院に移される場面で、お弟子に担架に乗せられまして奥の院の入定場所に運ばれる場面を描いたものです。大和絵絵巻の中でも優れた作品の一つと言われています。

◆

これ**【スライド54】**は、神道と密教とが混交

【スライド54】
重文 弘法大師丹生高野明神像（問答講本尊）
一幅 金剛峯寺蔵

した「問答講本尊」というものです。真ん中に弘法大師のお御影、下の方は高野山の地主の神さま丹生都比売明神と高野明神です。また、上のほうに、奥の院の弘法大師御廟のあたりの風景をかいてあります。下のほうには、高野山の山麓にあります丹生都比売神社といいまして、高野山の地主の神さまをお祀りされております神社があるのですけれども、その社頭の風景を描いたものです。上下の絵は「一遍上人絵伝」に大変近い絵です。真ん中の絵は、どうも室町時代の初頭頃の絵です。もともと問答講というのは、丹生都比売神社で鎌倉時代から行われるようになったのですけれども、一時中断をしておりまして、室町時代に復興をするのです。そのときに、どうも装丁を変えられたのではないかと思います。上辺の部分と下辺の部分と中央とは、実は画面が切れているので、装丁が変えられ再構成された絵のように思います。大変変わった神仏混交の様子を伝える高野山独特の信仰をもとにした絵です。

◆

これ**【スライド55】**は、お市方の肖像画です。織田信長の妹さんで浅井長政に嫁いだ悲劇の人として、歴史的に有名な人です。高野山に、こういうような諸大名の関係の肖像画というのはずいぶん残っています。昔から高野山は、戦国時代以来、さまざまな武将と高野山のお寺が檀縁地関係を結んだ関係がありまして、こういうような肖像画がたくさん伝わっております。

【スライド55】
重文　浅井長政夫人像　一幅　持明院蔵

◆

【スライド56】国宝　阿弥陀聖衆来迎図　三幅　有志八幡講蔵

最後になりますけれども、これ**【スライド56】**は、国宝の「阿弥陀聖衆来迎図」というものです。もともと比叡山の安楽谷、横川の一つの枝に分かれております谷の所に、どうも安楽谷の本堂というものがありまして、そこにお祀りをされていた来迎図なのですが、歴史的には有名な元亀2年の織田信長の比叡山攻めの時、どうも山のお坊さんが、こんな大事なものを焼かれては困るというので持ち出したものを、里のほうで警備番をしておりました武将の手におちたものです。本多廣孝という徳川方の武将が家康に命じられまして織田軍に参加をし手に入れて、一度自分の領地の関東のほうに持ち帰ったようです。その後、天台密教僧であった尊秀という人が天正15年に修理をした記録があります。

それがなぜ高野山に伝わったかというと、文禄２年、豊臣秀吉がお母さんの菩提のために高野山に青巌寺というお寺を造るわけですが、政治的なものがあったのだと思いますけれども、徳川方から、秀吉が造った青巌寺に、この画像を奉納されたようです。青巌寺の落慶供養願文に持仏堂にこの図と考えられる来迎図が祀られたことがかかれていたようです。それ以来、高野山はこれをずうっと守ってきたのです。

逸話なのですけれども、今春に比叡山と高野山の名宝展を開催している過程で、比叡山のお坊さんがこの来迎図を「高野山に略奪された」と言われて、私も困ったことがありますけれども、「そういうような歴史的な背景がありますよ」という説明をさせていただきましたら、なるほどと了解いただいた経緯があります。

中央に阿弥陀さんが描かれてありまして、周りのほうに二十五菩薩の仏さまがかいてあります。真ん中が阿弥陀さまで、下の向かって右が観音さま、左が勢至菩薩です。また、向かって左の幅の上のほうに三つの仏さまがかいてあります。これが阿弥陀三尊です。真ん中が阿弥陀さまで、こちらが観音さま、これが勢至菩薩です。同じ画面の中で同じ仏さまが二度かいてあります。大変不思議な感じです。実は、これは、絵巻物などでよく出てきます異時同図法という画法を使っています。阿弥陀さまが極楽浄土を出発されまして、亡くなった人を現世にお迎えにこられているわけですけれども、左の幅まで来られまして、さらに真ん中のほうにグーッと降りてこられましたよという時間の差を表すために、こういう表現を使われています。

宇治の平等院の扉絵のほうにも来迎図がかかれてありますけれども、その中の２面ほどに、こういう同じような異時同図法に基づいた表現の来迎図があります。そういうような伝統的な絵画手法が、この絵でも使用されています。

昔から、源信の作と一応言われているのですが、様式的には平安時代の終わりの12世紀の末ごろの作品ではないかと、専門家の中ではみられています。しかし、正面に向かって来迎する構図の来迎図としては、この絵しか伝わっておりません。大変有名な絵です。

◆

これ【スライド57】が、画面の左幅の下のほうにかいてありますすばらしい大和絵の山水です。仏さまの姿形は、専門家の立場からいいますと、上手ではありません。この絵は専門の仏画師でなしに、宮中などで活躍しておりました絵巻などの世俗画をかいておりました絵仏師の作品ではないかと思われます。

◆

実は、私がちょっと解明したのですけれども、33の仏さまを写真に撮りまして、画面の仏さまと同じ大きさにした型紙を造りましてこの絵【スライド58】の仏さまとあわしまして気が付いたのですが、まず最初に雲をかいて、仏さまの配置とかそういうものを型紙を作って構図をきめて下絵を描いたようです。同じ型絵を用いたお顔が多いので同じような顔をしている仏さまが多数います。

また、仏さまは、いずれもいろいろな楽器を持っていますが、ほとんど口を開いています。どうも二十五菩薩和讃のようなものを唱和し、妙なる音楽をかなで極楽浄土から降りてくるのですよという、『今昔物語』などで妙なる音が聞こえたことによって極楽浄土に生まれ変わったのだというお話がかかれておりますけれども、そういう話しの情景もこの絵の背景にあるように思います。

鎌倉時代の来迎図のそういう諸尊の仏さまというのは、どちらかといいますと、こういうような口を開いた感じの、何かを語りかけているような表現のものはほとんど見られません。そういう意味で、平安時代の人々が求めた弥陀来迎の情景がこの絵の中に込められているのかもしれません。

◆

これ【スライド59】は、腰太鼓をたたいている菩薩です。この菩薩も同じように口を開いておられまして、どうも和讃を唱えているようです。

◆

この【スライド60】菩薩は最たるものです。死を迎えられる人に、死というのは何も怖くありませんよ、極楽浄土に阿弥陀さまがお連れするためにお迎えにきましたよとの思いが表情に現れています。このような表現は、死に対する恐怖感を取り除くための一つの表現で、こういう浄土教絵画の中で、これほど明るい表情のニコッと笑った菩薩のいる仏画というのは、この絵しかありません。そういう意味では、往生という思想をその頃どうとらえていたかということがわかる、大変すばらしい来迎図だと思います。もう時間がまいりましたので、私の説明を終わらせていただきます。(拍手)(了)

【スライド57】阿弥陀聖衆来迎図　部分

【スライド58】阿弥陀聖衆来迎図　部分

【スライド59】阿弥陀聖衆来迎図　部分

【スライド60】阿弥陀聖衆来迎図　部分

高野山の歴史と文化財

高野山霊宝館主任学芸員　井筒　信隆

1）国・県指定文化財数（1996.3.5現在）

国　宝	25件	4,695点	県指定	36件	2,878点
重　文	177件	14,204点	計	238件	21,777点

（内訳）

	建造物	絵　画	彫　刻	工　芸	書　跡	考　古	史・名・天
国　宝	2(2)	8(21)	2(9)	1(1)	12(4,662)	0(0)	———
重　文	12(24)	50(129)	51(77)	30(72)	30(13,676)	3(224)	2(国指定)
県指定	4(7)	10(23)	1(1)	16(2,851)	2(3)	0(0)	8(県指定)

2）高野山霊宝館収蔵指定文化財

国　宝	23件	4,693点	県指定	13件	2,850点
重　文	132件	14,124点	その他 未指定収蔵文化財 10万点以上収蔵		

3）高野山の歴史と文化財

■(平安時代前期の歴史と現存文化財)

高野山は、弘仁７年(816)に、弘法大師空海によって真言密教の道場として開かれた山である。空海は、高野山に真言密教の教理に基づく壮大な伽藍を創案し建設を行ったが、金剛峯寺伽藍建設なかばで世を去った。大師創案になる伽藍の完成は高野山第２世真然大徳(僧正)時代の、仁和３年(887)頃である。約70年の歳月をかけ完成した金剛峯寺伽藍において真言密教僧の実践修行が本格化し始めた矢先に、宗祖空海が中国で書写し持ち帰った真言密教の精髄等を書き留めた『三十帖策子』の帰属を巡って、高野山金剛峯寺と東寺(教王護国寺)が争い、延喜17年(917)から約５年間は廃絶に近い状況に陥った。延喜21年(921)高野山奥の院に入定する空海に、朝廷から「弘法大師」の大師号が贈られ、東寺長者金剛峯寺座主観賢が朝廷から贈られた僧衣を入定する空海の衣を着せ替えたことから、その後弘法大師入定信仰が高野山に芽生えた。しかし、確たる寺領を持っていなかった高野山は経済的に恵まれずかろうじて伽藍維持が計られる状況であった。正暦５年(994)には、伽藍根本大塔の落雷がもとで、伽藍御影堂を残し諸堂や僧坊寺院が悉く焼失して衰亡する。

弘法大師空海が弘仁７年(816)に高野山を賜った以降の９世紀・10世紀の歴史は、弘法大師空海の私寺として開創されたことから寺領が無く、加えて雷火による堂塔の焼失と言う自然災害も重なってまさに多難な時代であった。

■(９世紀・10世紀の主な文化財)

国宝　聾瞽指帰	２巻	(金剛峯寺蔵)	弘法大師筆　平安前期
国宝　諸尊仏龕	１基	(金剛峯寺蔵)	弘法大師請来品・中国唐
重文　金銅仏具	８口	(金剛峯寺蔵)	中国唐・平安前期
重文　釈迦如来及諸尊像(枕本尊)	１基	(普門院蔵)	中国唐
重文　板彫胎蔵曼荼羅	２枚	(金剛峯寺蔵)	中国唐
重文　崔子玉座右銘断簡	１幅	(宝亀院蔵)	伝弘法大師筆　平安前期
重文　木造大日如来像	１躯	(金剛峯寺蔵)	平安前期
重文　木造不動明王像	１躯	(正智院蔵)	平安前期
国宝　文館詞林	12巻	(正智院蔵)	平安前期

■(平安時代後期の歴史と現存文化財)

衰亡していた高野山は、11世紀にはいるとようやく復興の気運が持ち上がり、南都興福寺の勧進僧であった祈親上人定誉が来山し伽藍諸堂の復興にあたった。また、高野山の勧進僧は弘法大師入定の霊地を説き、高野山は、この世の浄土であることを唱導し高野山参詣を勧めた。治安３年(1023)藤原道長が高野山に参詣し、奥の院の弘法大師廟に弥勒浄土往生を願い法華経や理趣経の埋納経を行ったことから、藤原摂関家や皇族関係者が相次いで来山し、貴族や皇族関係者による荘園の寄進や子院の建立が盛んとなり復興が進んだ。また、高野山の復興に参加した勧進聖達が真言念仏の拠点として、山上の各谷に庵室や寺院を建立した。12世紀にあっても、山上の寺院建立は盛んに行われた。その代表的なものに、覚鑁による密厳院や大伝法院の建立、覚法法親王の勝蓮華院、西行法師の庵室、後に東大寺勧進職になった俊乗房重源の新別所専修往生院などがある。このような高野山の活況は、久安５年(1149)の落雷による伽藍焼失も、平家の平忠盛、清盛父子による成功寄進によって、直ちに再建されるなど寺勢はすこぶる盛んであった。

■(11世紀・12世紀の主な文化財)

国宝　仏涅槃図	１幅	(金剛峯寺蔵)	応徳３年(1086)作
国宝　善女竜王像	１幅	(金剛峯寺蔵)	久安元年(1145)作
国宝　勤操僧正像	１幅	(金剛峯寺蔵)	平安後期
国宝　伝船中湧現観音像	１幅	(龍光院蔵)	平安後期
重文　両界曼荼羅図(血曼荼羅)	２幅	(金剛峯寺蔵)	久安６年(1156)
重文　阿弥陀浄土曼荼羅図	１幅	(西禅院)	平安後期
重文　木造大日如来及び脇侍像	３躯	(金剛峯寺蔵)	平安後期
国宝　色紙法華経	１巻	(金剛峯寺蔵)	平安後期
国宝　金銀字一切経	4,296巻	(金剛峯寺蔵)	大治3年(1128)
重文　紺紙金字一切経	3,575巻	(金剛峯寺蔵)	平治元年(1159)
国宝　宝簡集類	311巻	(金剛峯寺蔵)	平安後期～江戸時代
重文　比丘尼法薬埋納経関係品	22点	(金剛峯寺蔵)	天永４年(1113)
国宝　澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃	１合	(金剛峯寺蔵)	平安後期
重文　紙胎蒔絵念珠箱	１合	(金剛峯寺蔵)	平安後期

■(鎌倉時代以降の歴史と現存文化財)

鎌倉時代の高野山は、鎌倉幕府の強い影響を受けながら、建久８年(1197)に八条女院御願により行勝上人が一心院本堂(不動堂)を建立するなど、平安時代後期の寺勢を維持し発展した。特に、北条政子が源頼朝・実朝の菩提を祈り禅定院を建立し、さらに、同院を拡張して承久元年(1219)に金剛三昧院を建立するなど、武家の出家来山止住や荘園寄進があいついだ。また、高野山の弘法大師信仰や浄土信仰が全国に定着していった。鎌倉幕府は、高野山の拠点となった金剛三昧院を中心に、僧侶の学問奨励のために弘法大師著作物の木版印刷(高野版)を行い、修学の為に勧学会を実施するなど宗教文化活動に積極的に援助をした。さらに、平安時代以来ふもとの九度山から高野山までの参詣道(高野山町石道　約17km)に１町毎に建立されていた木製卒塔婆を石製に変える事業に対しても積極的に加担をし高野山に対する援助を惜しまなかった。

鎌倉末期から南北朝時代にかけての争乱期にあっても高野山の影響力に期待をして、南朝・北朝相方の関係から高野山勢力の取り込みをはかる勧誘が盛んであったが、中立の態度を崩さず護持を計った。

室町時代には、南北朝の中立策が幸いし、室町幕府の帰依を受けるとともに、高野山に教学整備が進められ、その後の高野山教学の基礎が確立された。しかし、室町幕府の勢力が減退して戦国時代にはいると全国におよそ30万石と言われていた荘園が戦乱の影響を受け、各地で戦国武士により略奪を受け経済的な困窮期を向かえることになった。高野山では、その対応策として、各地の有力戦国大名と高野山の子院が檀縁地関係を結び荘園の維持をはかることが行われた。この関係は、後世江戸幕府の幕府政策の参考にされ、江戸時代の大名と高野山子院との強固な檀縁地関係が生まれる先駆けとなった。室町時代末期には、織田信長による高野攻めによる危機に陥るが、明智光秀による本能寺の変が起こり、廃亡の直前で奇跡的に危機を免れた。長期にわたる戦乱で、高野山の経済的基盤は弱体化し、山上の堂塔や寺院は荒廃をしていたが、豊臣秀吉による天下統一の過程で、秀吉の高野攻に際して荘園の放棄を条件に和睦を結んだことから、秀吉の天下統一後、秀吉は亡母の供養のために青厳寺を高野山に建立するなど全面援助を行い堂塔等の再建や補修を行なった。また、２万１千石の寺領が高野山に秀吉によって与えられた。

江戸時代には、幕府の幕政の指導もあって、高野山の寺院は各地の大名と檀縁地関係を結び寺院の維持をはかる。徳川霊台や奥の院墓地に林立する大きな諸大名の五輪塔群等は、その歴史文化遺産である。しかし、高野山も諸大名と同じく参勤交代の制度が課せられるなど、幕府による締め付けが強く経済的弱体化は避けられず寺勢維持にやっとであった。

明治時代には、廃仏毀釈や寺領の停止等の影響を受け、その経済的、政情的難局を乗り越えるため、約500の寺院を統廃合して130ヵ寺に縮小され維持がはかられた。このような、様々な歴史的変遷を経ながらも、弘仁７年(816)に弘法大師空海によって開創されて以来、約1,180年の歴史と伝統を維持し現在に至っている。当然の如く、永い歴史の流れの中で築かれてきた歴史文化は、高野山に膨大な文化遺産を遺し伝存されてきた。まさに高野山は、我が国にあって他に類例のない「文化財の宝庫」であると言っても過言ではない。

■(鎌倉時代以降の主な文化財)

国宝　諸尊仏龕	１基	(金剛峯寺蔵)	弘法大師請来品・中国唐
国宝　金剛峯寺不動堂	１棟	(金剛峯寺蔵)	建久８年(1197)

国宝	金剛三昧院多宝塔	1棟	(金剛三昧院蔵)	承久元年(1219)
国宝	八大童子像(運慶作)	8躯	(金剛峯寺蔵)	建久9年(1198)
重文	木造四天王立像(快慶作)	4躯	(金剛峯寺蔵)	建久年間
重文	木造孔雀明王像(快慶作)	1躯	(金剛峯寺蔵)	正治元年(1200)
重文	普賢延命菩薩像	1幅	(正智院蔵)	鎌倉前期
重文	不動明王像(赤不動)	1幅	(明王院蔵)	鎌倉前期
重文	五大力菩薩像	1幅	(北室院蔵)	鎌倉前期
重文	大日如来像	1幅	(金剛峯寺蔵)	鎌倉後期
重文	毘沙門天像	1幅	(光台院蔵)	鎌倉後期
重文	弘法大師丹生高野明神像(問答講本尊)	1幅	(金剛峯寺蔵)	南北朝
重文	地蔵菩薩像	1幅	(宝寿院蔵)	至徳元年(1384)
重文	弘法大師行状図画	6巻	(地蔵院蔵)	南北朝
重文	武田信玄像	1幅	(成慶院蔵)	室町後期
重文	浅井長政夫人像(お市方)	1幅	(持明院蔵)	室町後期
重文	奥院経堂(石田光成建立)	1棟	(金剛峯寺蔵)	慶長4年(1599)
国宝	山水人物図(池大雅筆)	10面	(遍照光院蔵)	江戸前期

■(参考)弘法大師空海略伝

空海は、奈良時代末期の宝亀5年(774)に讃岐国多度郡(現在の香川県善通寺)に生まれ、18才の時、都の官立大学に入学するが官学の講義に失望し、仏道修行をはじめ、大学を中退する。24才に当たる延暦16年(797)に『聾瞽指帰』(別名『三教指帰』)を著し僧侶になることを宣言する。その後、南都大安寺の勤操大徳に従って仏道修行に励み、延暦23年(804)に中国唐に留学し、恵果和尚より真言密教を伝授され大同元年(806)に、多くの真言密教の請来品を持参して帰国した。その後、嵯峨天皇と漢詩や書道の交流を通じ親交を深め、一方、真言密教の秘法である「仁王経法」を修して国の平和を祈り、弘仁3年(812)天台宗の伝教大師最澄等に結縁灌頂を授けたるなど、唐より伝えた真言密教の宣揚につとめた。

弘仁7年(816)に空海は、紀伊国高野山を真言密教修禅の道場として建立をいたしたい旨を朝廷に願い出て許され建設を始める。弘仁12年(821)四国満濃池築造、弘仁14年(823)東寺造営、天長元年(824)神泉苑で祈雨を祈る。天長5年(824)庶民の為の学校を日本で初めて創立する。真言密教の宣揚、社会事業、高野山金剛峯寺の建設等々活躍し、承和2年(835)建設途次にあった高野山に於いて入定する。

一空書写聖教関係リスト(宝寿院蔵「聖教」普通部3－3号箱所在　無量寿院)

高野山宝寿院には、膨大な量の聖教古文書類が現存し高野山霊宝館に保存収蔵している。特別部については、この宝寿院伝来の聖教類の中から経典、儀軌、次第、思想書等の貴重書を抽出分類されている。普通部については比較的時代が新しいこともあって、ほぼ当時の状況で現在まで伝えられている。この「普通部3－3号箱」は、中院或いは無量寿院にいた「一空」と称した人物の聖教が収められている。

沙門一空の消息を知るものは少ないが、本聖教の奥書の年齢記述から江戸時代中期の元文4年(1739)に生まれ、十代後半に高野山に入山している。

	聖教名	数量	書写年	年齢	(整理番号)
1	四度加行口決	1冊	宝暦7年(1787)仲夏下旬書写	18歳	(14)
2	七曜攘災決	1冊	宝暦8年(1758)5月3日書写	19歳	(12)
3	星供次第	14帖1帙	宝暦8年霜月～明和7年6月3日書写		(49)
4	揀擇持日編	1冊	宝暦8年10月21日書写		(10)
5	入壇宿曜吉凶星宿属生人次第	1冊	宝暦9年(1759)正月21日書写	20歳	(105)
6	理趣経法私次第	1帖	宝暦9年12月20日書写		(40)
7	大日剣印	1帖	宝暦13年(1763)書写	24歳	(92)
8	持戒清浄口決	1巻	宝暦13年10月15日書写		(86)
9	中院相傳(永遍記)	1冊	宝暦14年(1764)3月21日書写	25歳	(60)
10	金剛界梵字次第	1帖	明和元年(1764)8月15日書写		(19)
11	金剛界黄昏次第	1帖	明和元年8月21日書写		(26)
12	中院本流聖教目録	1冊	明和元年10月17日書写		(99)
13	御本地供私次第	1帖	明和2年(1765)正月　日書写	26歳	(50)
14	別行次第(中院)	1帖	明和2年2月　日書写		(33)
15	朝暮例時作法(宥快)	1帖	明和2年春中旬書写		(96)
16	参拾帖目録(仁和寺御室)	1冊	明和2年4月6日書写		(98)
17	道場観集	5冊1帙	明和2年4月10日～8月5日書写		(81)
18	灌頂五瓶等作法	1帖	明和2年6月21日書写		(57)
19	形像開光法	1帖	明和2年7月21日書写		(70)
20	東寺三学十度異名諸流私記	1冊	明和2年夏上旬書写		(95)
21	神供作法(中院)	1帖	明和2年9月12日書写		(31)
22	大日経疏密印品秘訣	1冊	明和3年(1766)正月11日書写	27歳	(7)
23	十八道真言句義抄	2冊1帙	明和3年2月　日書写		(6)
24	五輪投地次第	1冊	明和3年3月7日書写		(23)
25	無盡荘厳次第私記	1冊	明和3年3月20日書写		(20)
26	胎蔵作礼方便次第	1冊	明和3年季夏1日書写		(22)
27	施餓鬼法	1帖	明和5年初冬中旬書写	29歳	(51)
28	天野伝(信日記)	1冊	明和5年霜月書写		(4)
29	十一面観音法	1帖	明和5年6月　日書写		(74)
30	飛行三股事	1冊	明和5年7月3日書写		(97)
31	弥勒法	1帖	明和5年9月5日書写		(39)
32	五色糸作法両界(中院)	1帖	明和5年9月　日書写		(55)
33	明算御受法次第	1帖	明和5年10月下旬書写		(90)
34	中院結縁灌頂	28帖1帙	明和6年(1769)5月7日～10月5日	30歳	(58)
35	十一面観音法	1帖	明和7年(1770)4月21書写	31歳	(38)
36	後夜念誦(中院流)	1帖	明和7年6月16日書写		(68)
37	愛染法	1帖	明和7年6月17日書写		(41)
38	仏眼法(中院)	1帖	明和7年6月21日書写		(34)
39	中院三十三尊法	33帖1帙	明和7年6月28日書写		(52)
40	護摩口訣	1帖	明和7年孟商下弦書写		(1)
41	四種護摩抄記(石山)	1冊	明和7年9月　日書写		(2)